越谷生まれの
江戸町人の活躍

千住の名倉（創業一二三〇年）日本橋千疋屋（創業一六六年）
駒形どぜう（創業二〇〇年）藤浪小道具（創業一二八年）

越谷市郷土研究会
第128回研究発表会
発表者
常任理事　高崎　力
平成12年6月25日（日）
越谷市コミュニティ
センター視聴覚室

〔年譜〕藤波與兵衛と浅草猿若町

六二八	推古36	浅草寺創建と伝えられる。
一六〇三	慶長8	出雲国小村三右衛門の娘阿国が京都で派手な衣装で歌い踊る。男女逆性＝傾く（かぶく）
一六〇七	慶長12	二月二十日江戸城御本丸と西御丸の間にて出雲の神子お国勧進歌舞伎踊を上演。
一六二〇	元和6	水除の為「日本堤」を築く。
一六二四	寛永元	二月中村勘三郎が中橋（現京橋）で初の江戸歌舞伎興行。後に勘三郎は姓を猿若と改め芝居小屋を猿若座と称した。
一六二九	寛永6	性風俗の乱れと称し女歌舞伎を禁止。
一六三二	寛永9	薩摩小兵太は江戸に下り、中橋にて操（あやつり）芝居を興行。
一六五二	慶安5	六月二十七日女歌舞伎に代わった若衆歌舞伎御制禁
一六五六	明暦2	十月九日吉原町を召し上げ、その代地として二万四千三百坪の土地を日本堤の辺に下され引料として金一万五千両（小間割十五両）下さる旨命ぜられる。
一六五七	明暦3	一月十八日明暦の大火。江戸城本丸、二の丸炎上。八月、二の丸跡へ越谷御殿の移築完了し将軍使用開始。同、遊里新吉原へ移転。
一六六一	寛文元	浅草聖天町に小出信濃守下屋敷できる。芝居の興行場所を堺町、葺屋町、木挽町五、六丁目に限定する。
一六六四	寛文4	二代目中村勘三郎浅草寺へ絵馬「狂言猿若人形」額を奉納＝別図
一七〇二	元禄15	十二月十四日浅野家義士四十七人本意を達す。
一七〇三	元禄16	中村座で赤穂浪士討入の芝居「曙我夜討」を上演。三日間で禁止。
一七一〇頃		名倉重直　大泊村（越谷市）より千住に移住。
一七一四	正徳4	三月、大奥女中絵島が山村座の生島新五郎と密通したことで一同処罰、絵島＝高遠へ、生島＝八丈島へ、山村座芝居断絶。
一七二一	享保6	森田座の「大鷹賑曽我」大当り二代目団十郎千両役者となる。
一七二四	享保9	延宝元（一六七三）から五十年間で市村座、中村座とも十四回全焼。三年に平均一回焼失となる。
一七三五	享保20	二代目団十郎吐血、萬吉栄次が成田山不動明王に願掛け治癒す。
一七七〇	明和7	この頃千住の名倉直賢骨つぎを開業。
一七九六	寛政8	武州松伏領南広島村の渡辺助七（20歳）江戸に出て浅草黒船町の飲食業長田屋に雇われる。
一八〇一	享保元	渡辺助七隅田川沿いに丼めしの越後屋開業。
一八二九	文政12	十月二十八日武州千疋村農業石塚勇次郎次男與兵衛生まれる。
一八三四	天保5	武州千疋村の弁蔵　日本橋葺屋町に「水菓子安うり処」千疋屋開店。
一八四〇	天保11	越後屋二代目助七家業を引継ぐ。
一八四一	天保12	五月十五日天保の改革の沙汰書公布。十月七日暁七半時堺町より出火し中村座、市村座とも類焼。十一月水野忠邦町奉行に、劇場の由来、存廃の可否を諮問し、その意見を徴す。十二月十日町奉行遠山左衛門尉は芝居の件を越前守へ答申

十二月十八日老中水野忠邦は町奉行へ「芝居移転取払」を決定通知。

一八四二　天保13　二月三日小出伊勢守下屋敷公収決定し雑司が谷へ代地、引越料白銀三百枚。
四月二十八日町奉行より月行事に申渡…「浅草山の宿小出候御下屋敷の地へ中村座、市村座、操人形座引き移り町名を猿若町と号す。
一丁目中村座、二丁目市村座、木挽町分（注‼河原崎座のこと）は三丁目に用意する。
六月四日堺町、葺屋町の地主および芝居関係者は北町奉行所の白洲にて奉行遠山左衛門尉景元より猿若町への移転申渡さる。
六月絵草紙屋の芝居役者、遊女絵など悉く停止される。また人情本作者為永春水は手鎖の刑。
七月十三日猿若町一丁目に大薩摩座完成…操人形座。
八月猿若町操芝居結城座初興行。
九月二十七日猿若町市村座開演。
十月四日猿若町中村座開演。
七代目団十郎は本物の甲冑を用いた為江戸十里四方追放され成田不動に籠る。
冬、木挽町五丁目森田座の控櫓の河原崎権之助芝居顔見世興行中に命ぜられて猿若町三丁目へ引移るべき替地を給せられる。

一八四三　天保14　九月猿若町三丁目河原崎権之助芝居初興行…（五月五日説あり）。
これにより“猿若三座”が揃い、明治五年（一八七二）まで続く。
河竹黙阿弥、芝より浅草正智院地内に転居してくる。

一八四六　弘化3　**越後屋三代目助七家業を継ぐ。**

一八五〇　嘉永3　三月十七日俳優市川海老蔵（白猿）驕奢に長じたる故を以て天保の末追放せられしが今年大赦に遇いて二月帰郷し再び芝居に出る。
十一月三座の歌舞伎の入替り顔見世狂言は吉例の通り十一月になる。
歌舞伎芝居小道具につき猿若三座の申合せは次の通り。
　中村座－蔦屋由太郎
　市村座－常磐屋清吉
　河原崎座－港屋熊吉
〉の常雇いとする。
以後三座申合せとして俳優の衣装、小道具は自弁を廃し座方一切負担に改める。

一八五一　嘉永4　春より所々に芝居興行あり、谷中、湯島、茅場、本所等の寺社境内なり。
秋より猿若一丁目中村勘三郎が芝居にて下総佐倉惣五郎が事跡を狂言に取組興行し「佐倉義民伝」人気を博し、これにより佐倉の村民江戸芝居見物、江戸より佐倉の霊社へ参詣多し。

一八五二　嘉永5　**石塚與兵衛単身にて千疋村（越谷市東町）より江戸に出る。**

一八五三　嘉永6　**與兵衛（24歳）江戸浅草馬道大師堂傍に居し市村座へ茶番として出入する。**
中村座にて三代目瀬川如皐作「与話情浮名横櫛（源氏店）」初演。
植木職森田六三郎は宮家下賜の浅草の土地に百花百草を栽培して「花屋敷」として一般公開す。（浅草芸能伝より）

一八五四　安政元　八月六日八代目団十郎は旅先の大阪で謎の自殺。以後死絵流行す。
十一月五日浅草聖天町より出火し、三座、茶屋等一帯を焼失す。

一八五五　安政2　十月二日の安政の大震災で吉原や猿若三座焼失。
與兵衛は越谷地方から草履、野菜、穀物を大量に買付け大八車等にて江戸へ送り大きな利益を得た。

一八五六　安政3　三月河原崎座は安政地震で休座し森田座が復活する。
三月市村座復興し與兵衛は蓄財をもとに座蒲団の株を買い観客用の貸座蒲団業を始める。
更に復興資金に窮していた座元に醵金し利分を得る。なお、収集していた小道具を「臨時小道具方」として市村座に貸貸する。

一八六〇　万延元　市村座で「三人吉三廓初買」初演
八月二十七日暮六時猿若町一丁目勘三郎が芝居の後、茶屋奴利屋より失火し、三座とも焼失す。

一八六二　文久2　六月猿若町市村座の一件起こる。この件は「千住・名倉」参照。

一八六三　文久3　十二月二十七日より翌四年六月二十七日まで両度幕府の御上洛あり御留守中三座とも芝居興行を休む。

一八六四　元治元　十月御上洛の済ませられし御祝儀として江戸町人一統へ六万三千両の金子を賜る。

一八六五　慶応元　二月五日與三郎誕生（後の二世藤波與兵衛）

一八六八　慶応4　四月十一日江戸開城。九月八日明治と改元。

一八七二　明治5　一月市村座潰れて村山座と改称。この時元市村座の小道具師常盤屋主人は大阪へ
落居。そこで仕切場の茶番與兵衛が中村座の萬屋の弟の米さんに相談して小道具
を間に合わす。…小道具業「藤浪」の創業。
二月二十九日猿若三丁目狂言座守田勘弥は築地新富町四丁目芝居移転許可される。
十月守田座新富町四丁目で興行始める。

一八七三　明治6　二月新規劇場四カ所御免となり、四月に本郷春木町一丁目奥田座、蠣殻町二丁目
中島座、久松町喜升座、八月に日本橋中橋鞘町に浜山座が開業。

一八七四　明治7　五月村山座改め宮本座（元の市村座）

一八七五　明治8　守田座改め新富座。六月、浅草橋・雷門間にガス灯がつく。

一八七七　明治10　第一回内国博覧会が上野公園で開催。

一八七八　明治11　三月中村座改め都座。新富座で照明にガス灯を用いる。

一八七九　明治12　三月都座（元中村座）改め猿若座。

一八八二　明治15　浅草田圃の埋立工事と大池（瓢たん池のこと）の開さく始める。

一八八三　明治16　十一月猿若座（旧中村座）西鳥越町へ移転（明治17年説あり）

一八八四　明治17　一月瓢たん池開さくと田圃の埋立て完了し浅草六区が誕生。

一八八五　明治18　この頃、東京各劇場の小道具貸与は悉く與兵衛の手中に収める。
五月浅草公園で植木屋六三郎が「花屋敷」を開園。
十月浅草六区に水族館できる。十二月仲見世が煉瓦造り二階建てとなる。

一八八七　明治20　四月井上馨外務大臣私邸に於ける天覧歌舞伎の小道具の一切を「藤浪」が提供。
九代目市川団十郎出演「勧進帳」「高時」「土蜘」等。
六月二十五日浅草公園六区三号地に茨城県小田村出身の根岸浜吉によって常盤座
を建設、木造平屋、舞台はガス灯、客席はランプ、定員四五〇人、歌舞伎、新派、
連鎖劇、活動写真等上演。

一八八九　明治22　十一月木挽町に歌舞伎座開場。年四回の定期興行とす。
初代藤波與兵衛「吹きぼや」を発明。

一八九〇　明治23　十一月十三日浅草千束町に凌雲閣が開場。高さ67m十二階建、入場料八銭、
小人半額。

一八九一　明治24　藤波藤三郎（後の三世藤波與三郎）生まれる。

一八九二　明治25　十一月宮本座（旧市村座）下谷二長町に移転し"猿若三座"はこの時点で消滅。

一八九三　明治26　十一月明治座開場（千歳座の跡地）

一八九五　明治28　四月二世與兵衛は新富座五世尾上菊五郎の「加賀見山再岩藤」の骸骨を造り評判。
十月藤浪小道具の土蔵竣工。地下一階、地上三階、壁厚八十センチメートル。
この時、初世六十歳、二世三十歳、三世四歳。
なお壁は川口松太郎の父＝左官職が漆喰塗りをした。

一八九六　明治29　四月藤浪小道具は五世尾上菊五郎の馬を創出し好評。

一八九七　明治30　二世藤波與兵衛は九世団十郎の獅子頭、三本太刀、胸当の模造品を作る。
…後に本物は焼失し模造品は助かり貴重品となる。

一八九八　明治31　十月十一日浅草公園奥山に水族館開場。

一九〇三　明治36　二月五世菊五郎、九月六世団十郎、翌年八月初世左団次相次いで死亡し、よからぬ
噂が立つ。十月電気館はわが国初の活動写真常設館となる。

一九〇六　明治39　十月十四日初代藤波與兵衛は今戸河岸隠居所で没（数78歳）
十一月二代藤波與兵衛（與三郎のこと）千疋村（越谷市）伊南理神社に石造狐
一対奉納。連名＝浅草・藤波与三郎、日本橋・石塚要助、千疋村・石塚長八、
東方村・中村又蔵。

一九〇八　明治41　十一月純洋風の有楽座開場。

一九〇九　明治42　十月新富座は関西より進出の白井松次郎、大谷竹次郎兄弟が買収。
千疋村伊南理神社へ石燈籠奉納寄付金十円の欄に「東京猿若町藤波与三郎」

一九一〇　明治43　七月本郷座を白井、大谷兄弟が買収。
八月十五日大洪水で下町全域浸水。この時、駒形どぜう五代目助七は飲料水、
握飯、梅干持参で千住の名倉医院を水害見舞い。資料参照

一九一一　明治44　三月洋式の帝国劇場が開場。五月明治座で岡本綺堂作「修善寺物語」初演。

一九一二　明治45　六月東京歌舞伎座を白井、大谷兄弟が買収。

一九一三　大正2　株式会社根岸興業部社長二代目小泉丑治、専務根岸吉之助は浅草金龍館、常磐座、
東京倶楽部、公園劇場、観音劇場、富士館後に木馬館を経営する。

一九一六　大正5　三月より根岸興業部二代目小泉丑治は常磐座、金龍館、東京倶楽部の「三館共
通切符」を売出し人気。
四月松井須磨子ら芸術座第一回新劇普及興行を常磐座で開く。

一九一七　大正6　一月浅草オペラの伊庭孝、高木徳子一座が常磐座で上演、大流行す。

一九一九　大正8　五月エノケン＝榎本健一15歳で根岸歌劇団に入り金龍館初舞台。
五月九代目市川団十郎の「暫」銅像が浅草寺本堂裏に建立。

一九二一　大正10　二月十五日二代目藤波與兵衛（与三郎）猿若町の自宅で没（57歳）
十月歌舞伎座失火で焼失。

一九二三　大正12　九月一日関東大震災で東京の主な劇場焼失。
浅草猿若町で焼失を免れたのは藤浪小道具の土蔵だけ。
焼け出された藤浪小道具の職人は二代目與兵衛の妻の実家である蒲生村（越谷市）
の大熊家に避難する。

一九二四　大正13　三月三十日震災復興した猿若町は「猿若町会」を設立し、初代会長に藤波藤三郎
（三代目與兵衛）が推挙されたが翌年退任。
三月浅草奥山昆虫館を木馬館に改造し、大和屋三姉妹による「安来節」を上演し
全国的安来節ブームを起こす。

一九二五　大正14　ラジオ放送開始。四月歌舞伎座再建。新橋演舞場落成。

一九二六　大正15　六月　藤波光夫(てるお)（四代目藤波與兵衛）生まれる。

一九二七　昭和2　十二月三十日地下鉄浅草－上野間開通。一回十銭。東洋で始めて。

一九二八　昭和3　越後屋四代目助七死去し繁三が五代助七を襲名。
八月松竹歌劇団（後の松竹少女歌劇団・ＳＫＤ）発足し水ノ江滝子（ターキー）
らがデビュー。

一九三〇　昭和5　三月藤波光夫の弟隆之生まれる。

一九三一　昭和6　五月東武電車浅草へ乗入れる。

一九三三　昭和8　浅草常磐座で喜劇団「笑の王国」誕生。

一九三四　昭和9　二月大江美智子、七月不二洋子らの女剣劇誕生し伏見澄子を含めて「女剣劇
三羽烏」といわれた。

一九三五　昭和10　「あきれたぼういず」が人気。

一九三七　昭和12　七月東洋一といわれた国際劇場が開場。

一九四四　昭和19　空襲激しくなり藤浪小道具では大量の演劇用小道具を馬力、荷車、舟等で

大相模村東方中村家、蒲生村大熊家、秩父の知人宅へ疎開。

一九四五　昭和20　三月十日大空襲により浅草一帯も焼失し、浅草寺は二王門と伝法院以外は焼失。
藤浪小道具は「藤浪土蔵」のみ焼失を免れる—資料
藤波一家は大相模村中村家に疎開し、四月光夫は中村家より入隊し、七月陸軍豊橋第二予備士官学校入校し八月習志野戦車学校入校の後八月十八日復員して大相模村中村家に住む。
九月小菅の藤浪倉庫に工作場を仮設し、浅草猿若町の焼跡にバラックの藤浪小道具事務所を建て営業を再開。

一九四六　昭和21　四月浅草猿若町に藤波家の住居と藤浪小道具工作場を建てる。

一九四七　昭和22　三月十五日下谷区と浅草区が合併し台東区となる。十一月国際劇場再開。

一九四八　昭和23　八月藤浪小道具店は資本金百万円の「藤浪小道具株式会社」を設立、社長に三代目藤波與兵衛、専務に長男の藤波光夫。

一九五〇　昭和25　浅草歌舞伎かたばみ座が東武鉄道ビル浅草松屋六階のスミダ劇場に開演。客席は2/3は畳敷、1/3椅子席。

一九五一　昭和26　一月二年間の復旧工事により歌舞伎座落成。

一九五二　昭和27　十二月二十四日三代目藤波與兵衛（藤三郎）鎌倉の療養先で死亡（63歳）
十一月より"はとバス"駒形どぜうに寄るようになる。

一九五三　昭和28　一月藤波光夫藤浪小道具（株）社長に就任（26歳）。
二月ＮＨＫＴＶ放送開始。
三月藤波光夫東京大学経済学部卒業。弟隆之東北大学文学部卒業。

一九五四　昭和29　藤波隆之藤浪小道具（株）専務取締役に就任。
十二月藤波光夫四代目藤波與兵衛を襲名。披露宴は吉原松葉屋。

一九五五　昭和30　七月浅草松屋六階スミダ劇場かたばみ座は王子デパートへ移動。

一九五六　昭和31　八月藤浪小道具（株）資本金三百万円。

一九五八　昭和33　根岸興業部の木馬館（回転木馬）廃業。三月で吉原の灯消える。
十月浅草寺本堂落慶。

一九六〇　昭和35　歌舞伎初の訪米公演に藤浪小道具参加。
五月三日浅草寺雷門九五年ぶりに再興—松下幸之助の拠金。

一九六四　昭和39　四月一日浅草寺宝蔵門落成
五月藤波光夫住居を石神井公園湖畔に転居。
十一月八日市村座跡記念碑できる。
十一月蒲生の越谷倉庫を拡張。

一九六六　昭和41　七月藤波隆之国立劇場開場し企画課長に就任。
十月一日住居表示制度実施で浅草猿若町は浅草六丁目の一部となる。

一九六九　昭和44　七月藤浪小道具労働組合は歌舞伎座でストライキ。

一九七二　昭和47　藤浪小道具蒲生倉庫を更に拡張。
六月歌舞伎第二次ヨーロッパ公演に参加。

一九七三　昭和48　四月藤波光夫日本綜合舞台（株）社長に就任。
十月浅草六丁目に新社屋落成。
十一月二日浅草寺五重塔再建。
八月藤波隆之国立劇場芸能部長に就任。

一九七四　昭和49　三月十日四代目藤波與兵衛著「芝居の小道具」出版。
七月藤波光夫ＮＨＫＴＶ「スタジオ１０２」「カメラリポート」に出演。
十一月十五日浅草猿若町碑を建てる。

一九七五　昭和50　五月七日四代目藤波與兵衛（光夫）急死（48歳）
五月二十五日藤浪小道具（株）会長に藤波弘子。社長空席、副社長に白沢純就任。

一九七六　昭和51　二月日本最古の常設映画館の電気館閉館し取壊す。
五月七日藤波隆之著「小道具再見—四代目藤波與兵衛追悼集」出版。
五月七日藤波弘子著「四代目藤波與兵衛」私家版。
一九七七　昭和52　浅草木馬館安来節40年の歴史に幕。
一九七八　昭和53　NHKTV「おていちゃん」放送。
一九八一　昭和56　五月十三日市村座跡の碑建つ。八月浅草サンバカーニバル始まる。
一九八二　昭和57　五月十五日藤波隆之著「伝統芸能の周辺」出版。
一九八三　昭和58　四月二十五日国際劇場解体。
一九八六　昭和61　七月十日浅草仁丹塔取壊し。
十一月三日浅草寺境内で九代目市川団十郎歌舞伎十八番「暫」の銅像復活除幕式行なう。

浅草・藤波與兵衛親戚関係図（私案）

大相撲（中村家）　大相撲次郎能高（初代）……重太郎（25代）
- 重太郎（25代）＝とし（次女）
  - 寿馬（26代）＝（福田）伊都
    - 穎司（27代）
  - 千枝（藤波家より府立一女へ通学）
  - たえ＝収文（養子）

蒲生（大熊家）……
- とし（次女）
- 清一（若死）…
- うた子（長女）

浅草（藤波家）　藤波よし
- 与兵衛（次男）（初代）
  - 与三郎（二代）＝うた子（長女）
    - 藤三郎（三代）＝のぶ子
      - 光夫（四代）＝（辻）弘子
      - 隆之

千疋（石塚家）　石塚勇次郎
- （長男）……石塚長八（千疋村）……実
- 石塚要助（日本橋）
- 中村又蔵（東方村）……中村喜久三

年表作成基本図書・資料

「風俗画報」東陽堂　明29
新美　武「浅草猿若町新美商店」　昭48（非売品）
藤波光夫「芝居の小道具」日本放送出版協会　昭49刊
藤波弘子「四代目藤波與兵衛」杜陵印刷　昭51刊（私家版）
藤波與兵衛「小道具再見」日本放送出版協会　昭53刊
浅草の会「浅草双紙」未来社　昭53刊
月刊「未来」　未来社　昭56刊
藤波隆之「伝統芸能の周辺」未来社　昭57刊
浅草の会「写真に見る浅草芸能伝」　平2刊
和角　仁・福田和宏「歌舞伎入門辞典」　平6刊
「図説・浅草寺今むかし」金龍山浅草寺　平8刊

接骨医　千住の名倉　基本年表

秩父氏（略）

畠山氏（略）

初代　名倉行家（一四五九－一五二二）二十三世秩父加賀守行家
　北条早雲の小田原城主大森信濃守攻略に参加

二代　名倉元重（一四八三－一五一一）二十四世秩父平太郎元重
　娘二人を川越次郎太夫重常と江戸五郎左衛門へ嫁ぐ

三代　名倉重秋（二十五世畠山三郎太夫重秋）
　居を秩父郡矢畑に移す

四代　名倉重親（二十六世畠山三郎兵衛重親）
　居を秩父郡奈倉に移す

五代　名倉重清（二十七世畠山杢頭重清）

六代　名倉重則（一五二九－一五七〇）二十八世畠山三郎重則
　北条氏政麾下。永禄十三年（一五七〇）武田信玄名倉城を攻め重則（42歳）戦死。子の名倉数馬之助重治は武州岩槻浄安寺（二代元重の子憲周が僧であった寺）に落ちのびる。

七代　名倉重治　畠山、秩父の姓を棄て、大泊村（越谷市大泊）を開拓し、名を善兵衛と改める。元和二年（一六一六）没

八代　名倉伝左衛門　万治三年（一六六〇）没

九代　名倉善兵衛　貞享四年（一六八七）没

十代　名倉六兵衛　正徳元年（一七一一）没

十一代　名倉重直（一六六八－一七二七）千住名倉初代。江戸千住に住む。名を弥次兵衛と改め農家として暮らす。享保十二年五月二十五日没（60歳）敷地一万坪。

十二代　名倉重方　弥右衛門と号し宝暦十一年（一七六一）三月十一日没

十三代　名倉勝右衛門（女主人）宝暦九年（一七五九）六月二十一日没

十四代　名倉直賢（一七五〇－一八二八）骨つぎ名倉の始祖。

一七七〇　明和7　この頃直賢骨つぎを開業。

一七七二　明和9　二月二十九日目黒行人坂より出火し三日間江戸市内を焼く。この火事で23人治療す。この時鳶と芸者の治療費はタダとす。後に仕事師、役者、相撲取、幇間まで無料を拡大。

一八一五　文化12　十月二十一日千住宿で酒合戦あり。直賢は谷文晁、蜀山人、亀田鵬斎、酒井抱一らを同道す。

一八一八　文政1　直賢次男知重日本橋元大阪町に名倉分院を開業。

一八二七　文政10　知重の日本橋名倉、相撲取りと役者のみ治療費無料とする。

一八二八　文政11　七月四日業祖直賢没（79歳）

一八三四　天保5　千住名倉良皆の長男勝介勘当され、伯父知重は近くの箔屋町に接骨医を開業させる。勝介を箔屋町名倉と呼ぶ。

一八三九　天保9　九月堺町中村座の「五条橋弁慶」で菊五郎は橋から落下観客席の知重（日本橋名倉）は楽屋へ走り応急手当てをした。

一八四三　天保14　一月猿若町市村座で中村鶴蔵（後の三世仲蔵）舞台で膝を打ち日本橋名倉で

治療、十日間で治る。
二月坂東彦三郎梯子で右手首をくじき日本橋名倉へ通院。

一八四四　天保15　七月二十四日田所町湯屋の出火で日本橋名倉類焼。この時両国米沢町（薬研堀）に家を買う。

一八四八　嘉永元　一月千住名倉へ「御鷹野御成につき御休息所申しつくるものなり」
千住名倉は屋敷、母屋等大改修す（現在の様式はこの時造成）
十一月十八日徳川家祥（後の十三代家定）の鷹野あり、名倉市蔵方へ御腰掛る。

一八五〇　嘉永3　二月八日名倉知重没（53歳）

一八五一　嘉永4　一月九日徳川家祥の鷹野あり、名倉市蔵方へ御腰掛り。

一八五五　安政2　十月二日午後十時安政の大地震。震源地亀戸ー市川。下町大被害、良音は落下した梁で足を骨折。

一八五六　安政3　新門辰五郎の依頼で名倉勝介と相政は、小金井博徒の小次郎三宅島遠島の際、佃島の沖で小次郎の老母と女房との船上の対面を取り計らう。

一八六一　文久元　四月二十一日名倉良音没
秋、三遊亭円太郎（一八三九ー一九〇〇）師匠を伜の円朝が背負って名倉へ腰痛治療にくる。芸人は無料につき円太郎はお礼に俄か寄席を診療室を取り払って通院客を交えて開く。

一八六二　文久2　六月浅草猿若町市村座とめ組（新門辰五郎の配下）の若者との喧嘩あり、名倉勝介（箔屋町名倉）と相模屋政五郎（口入屋相政）が仲裁す。
八月十五日右喧嘩の手打ち式を江戸橋畔で行なう…別紙資料
この頃の勝介の交友は相政、浅草・新門辰五郎、相撲・大纒長吉、役者・沢村田之助、勝海舟、榊原鍵吉など。

一八六三　文久3　名倉勝介、本家千住名倉の勘当許され、江戸火消四十八組の主達は勝介に同伴し千住名倉に至る。行列は千住宿の長さに匹敵。

一八六七　慶応3　夏、円朝師匠は、文久元年のお礼の宣伝を「心中時雨傘」の中で取上げ「名倉で治らなきゃ　あきらめるよりしょうがない」と。

一八七一　明治4　十一月二十三日名倉勝介没（61歳）

一八七三　明治6　四月十一日名倉弥一（千住名倉）の発案で榊原鍵吉らが「撃剣会」（街頭剣術のこと）を左衛門町河岸で行い評判となる。

一八七四　明治7　医制により“名倉”は「整骨科」の開業医に区分される。
軍医監の名倉知文は「整骨説略」を出版。

一八七五　明治8　九月十七日新門辰五郎没（76歳）

一八八八　明治21　十月二日陸軍軍医監名倉知文没

一八九〇　明治23　八月二十七日名倉市蔵（名倉十六代）没（73歳）

一八九一　明治24　十月濃尾大地震あり、名倉弥一（千住名倉）緊急出張治療の命令。
治療所にした寺からのお礼の土産の唐紙の寿老人の絵を調べたら「崋山　渡辺登」であった。

一八九六　明治29　十二月田端ー北千住ー土浦間の鉄道開通し名倉家の土地を通過。

一八九九　明治32　八月北千住ー久喜間の東武鉄道開通し名倉家の土地を通過。

一九〇〇　明治33　名倉弥一「俺のところもようやく二十万円の金ができた」。
参考比較…浅草橋架橋費三万二千円、日比谷公園造成十七万五千円。

一九〇二　明治35　この頃の名倉医院の治療費　外来患者　十八銭～二十銭
入院患者　三十五銭
参考比較…女子郵便局員日給　二十銭～二十八銭
十一月二十七日名倉弥一没（64歳）

一九〇三　明治36　徳川公侍医名倉納（麹町名倉）没

一九一〇　明治43　八月十二日明治43年の大洪水で名倉家水につかる。駒形どぜう五代目助七飲料水、握飯、梅干で見舞に来る…別紙資料あり。

一九一九　大正8　名倉謙蔵南足立郡郡会議員に当選。

一九二四　大正13　六月荒川放水路名倉家の裏を通る。

一九二六　大正15　千住火力発電所（お化け四本煙突）名倉家の土地買収地に建設。

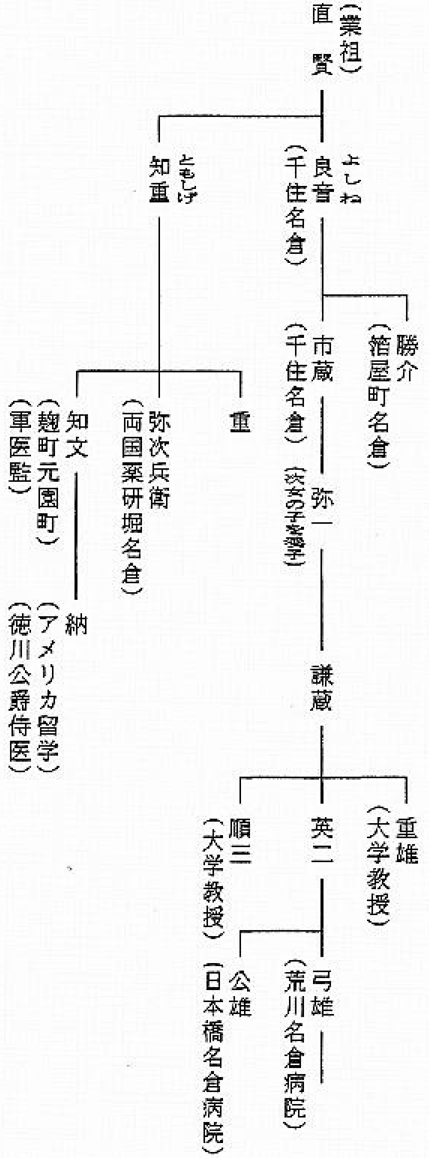
一九二七　昭和2　名倉弓雄（北千住名倉二十代）生まれる。

一九三一　昭和6　名倉英二（名倉十九代）御茶ノ水に「千住名倉分院整骨所」開院。「講談倶楽部一月号付録」全国金満家大番付で「二百万円東京千住名倉謙蔵」。参考比較…四億円三菱岩崎久弥、同三井八郎右衛門。

一九三九　昭和14　四月二十三日名倉謙蔵没（74歳）

一九七四　昭和49　五月二十日名倉弓雄著「江戸の骨つぎ」刊行。

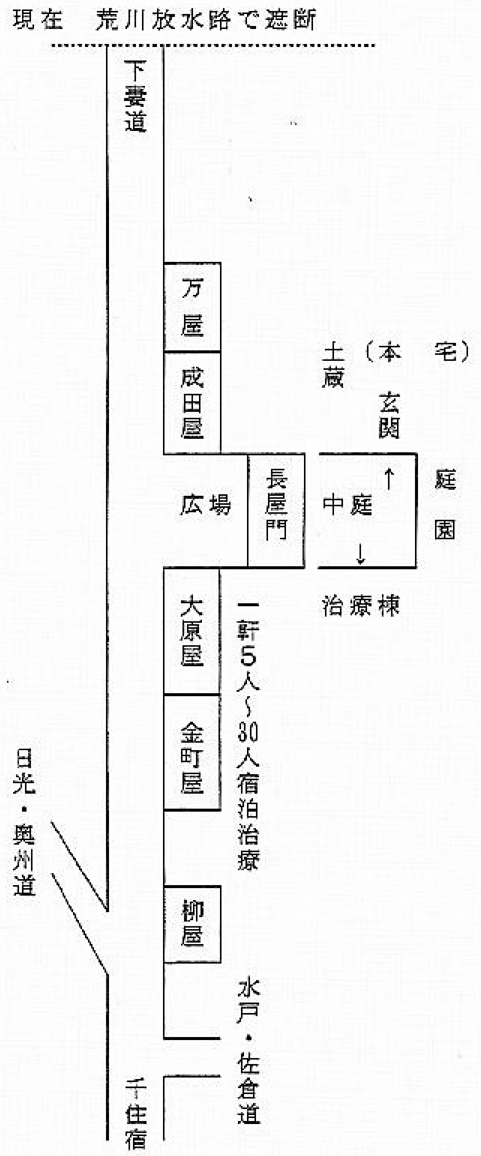
①骨つぎ名倉系譜（私案）



②組織

先生——代診——書生——見習——権助（下働）

③代診と宿屋（略図私案）



④ 治療材

黒膏　ニワトコ……蒸す・搗く・擂る・練る―キハダ―日本酒―姫糊

包帯　三河の生木綿（荒い）

副木　紀州産の杉

⑤ 患者数（一日当）

明治　百人

明治〜大正　三百人〜四百人

大正〜昭和　六百人〜七百人

年表作成基本図書・資料

名倉弓雄「江戸の骨つぎ」毎日新聞社　昭49年刊

日本橋千疋屋総本店　基本年表

一六一八　元和4　庄司甚右衛門幕府に出願し葺屋町傍に二丁四方を埋立て遊廓吉原を造る。

一六二六　寛政3　吉原五町完成。甚右衛門の架けた橋を「親父（おやじ）橋」という。

一八三四　天保5　千疋村（越谷市東町）出身の弁蔵は葺屋町親父橋畔に水菓子、蔬菜類の店を構え「千疋屋弁蔵」と呼ばれた。

一八四三　天保13　七月十三日幕府は魚類、野菜類の問屋仲間禁止令公布。十二月二十七日千疋屋二代目の妻むら浅草駒形鰹節大店の「大清」の三女として生まれる。

一八六四　元治元　十二月初代弁蔵没。長男文蔵相続する。この頃千疋屋は幕府御用達となる。

一八六七　慶応3　六月十一日　大島代次郎（後の千疋屋三代目）生まれる。

一八七七　明治10　一月　千疋屋第二代文蔵没。

一八八一　明治14　中橋（京橋）に分店を開く。

一八八七　明治20　一月二十日　丈一郎（後の四代目大島代次郎）生まれる。

一八九四　明治27　銀座店を出す。初代店長斉藤義政

一九〇〇　明治33　十一月　「風俗画報・日本橋区案内」に「葺屋町十番千疋屋内外果物凍氷販売電話浪花二二八一番」。

一九一〇頃　明治43　三代目代次郎は店を葺屋町より室町（現在地）に移し煉瓦造三階建てとする。

一九二〇　大正9　六月六日　千疋屋三代目大島代次郎没。

一九二三　大正12　丸ビルに出店。

一九二四　大正13　十月二十日　千疋屋二代目妻むら没。十二月十八日　東堀留川埋立て工事により「親父橋」廃す。

一九二五　大正14　銀座松屋にフルーツパーラー出店。

一九二七　昭和2　七月一日　栄一（後の五代目、現取締役会長）生まれる。

一九二八　昭和3　浅草松屋に出店。この頃東京府荏原郡駒沢村上馬引澤に「千疋屋農場」造成。

一九三〇　昭和5　海上ビルおよび伊東屋ビルにフルーツパーラー直営店を出す。

一九三八　昭和13　千疋屋を株式会社に改組。

一九四五　昭和20　戦災により社屋焼失。

一九五八　昭和33　四月二十一日　大手町ビルに出店。

一九五九　昭和34　六月二日新大手町ビルに直営店を開く。

一九六〇　昭和35　一月二十日　四代目代次郎没（全国同業者組合長従六位勲六等瑞宝章）

一九六四　昭和39　五月二十日　新宿ステーションビルに出店。

一九六七　昭和42　三月三十日　資本金三千万円。

一九六九　昭和44　十一月十一日　玉川高島屋店に出店。

一九七一　昭和46　四月五日　日本橋本店ビル新築開店（現在のビル）。デーメ・テール千疋屋発足し、フルーツパーラ&レストラン、宴会場、製菓工場等経営する我が国最大の総合果物店となる。

一九七三　昭和48　八月三日　有限会社千疋屋興業が千石ビルをテナントビルとして開店。その十階に計算センターを移す。

一九七七　昭和52　三月三日　西武新宿店に出店。

一九七八　昭和53　四月六日　池袋サンシャイン60に出店。五月二十日　柏高島屋に出店。

一九七九　昭和54　四月十六日　株式会社千商営業開始…食品・酒類輸入卸、ワイン・果物瓶缶詰輸入販売。

一九八〇　昭和55　十一月七日　横浜駅東口ポルタ店開店。

一九八八　昭和63　三月十一日　川崎西武店に出店。

一九九二　平成5　二月二十六日　信濃町ステーションビルに開店。

一九九五　平成7　九月六日　有楽町西武店に出店。

一九九六　平成8　十月四日　新宿高島屋に出店。　十月九日　池袋西武に出店。

年表作成基本図書・資料

日本橋・千疋屋総本店　庶務資料　平10

駒形どぜう越後屋　基本年表

一七七六	安永5	初代渡辺助七　武州北葛飾郡松伏領南広島村（吉川市）農業渡辺庄三郎の四男として生まれる。
一七九六	寛政8	初代助七（20歳）江戸に出て浅草黒船町（厩橋）の飲食業長田屋に雇われる。
一八〇一	享和元	一月二十日初代助七（25歳）は隅田川沿いの駒形町亀屋徳兵衛の持店を借り、善六を雇人として井めしの越後屋を開業。三月十八日から十五日間浅草寺の開帳があり店大いに繁昌す。食材の鯨肉は日本橋室町一丁目丸屋源三郎から仕入れる。
一八〇六	文化3	助七が妻げんを迎える。家主庄右衛門の持ち店「海老屋」（現在の駒形本店の位置）を買収し独立店舗を構える。開店の暖簾文字は初代撞木屋仙吉に依頼し「どぜう」と染め抜く。この頃、浅草寺仲見世に掛店数戸を所有。
一八一六	文化13	初代助七は実兄吉平の三男平蔵（後の二代助七）を養子に迎える。
一八三一	天保2	平蔵が日本橋高砂町大黒屋飯塚吉郎の長女とめを妻に迎える。
一八三二	天保3	平蔵に長男元七（後の三代助七）が生まれる。初代助七死去（58歳）、妻げんが世帯を仕切る。
一八三三	天保4	浅草東仲町常陸屋から出火し越後屋類焼す。
一八四〇	天保11	二代助七（平蔵）世帯を譲り受ける。この頃商売不振。
一八四二	天保13	天保改革により江戸市中の芝居小屋は浅草猿若町にまとめられる。
一八四六	弘化3	初代の妻げん死去（58歳）。この頃商売不振。元七は義弟の経営する室町三丁目浮世小路の浮世汁粉店を義弟の死により後見役となる。
一八四七	弘化4	元七（19歳）が小梅村植木職大場勘四郎の次女とみを妻に迎える。
一八四八	弘化5	三代助七（元七）世帯を譲り受ける。この頃よりどぜう汁、鯨汁、鯉こくに加えどぜう鍋を売り出す。
一八五五	安政2	二月十八日より八十日間浅草寺観世音開帳あり越後屋非常に繁昌。十月二日江戸に大地震、駒形町豊田屋から出火し越後屋全焼す。十一月一日越後屋元の場所で再興開業す。
一八五七	安政4	元七に七三郎（後の四代目助七）生まれる。この頃商売繁昌。
一八六五	慶応元	店舗並びに住居を増築。
一八六七	慶応3	世情不安増大し越後屋も七日間程休業す。
一八六八	明治元	五月十五日　上野彰義隊戦争により越後屋休業。
一八七〇	明治3	三男七三郎（13歳・後の四代目）を年季奉公に出す。
一八七一	明治4	三代助七（元七）若死（39歳）し、七三郎（14歳）の若年につき祖父平蔵（64歳）が後見となる。七三郎が元服し四代目助七となる。
一八七三	明治6	諏訪町紅屋から出火し越後屋類焼す。
一八七五	明治8	一月二十八日越後屋店舗を新築し開業。
一八七七	明治10	四代目助七（七三郎20歳）が浦和沼影細渕七郎兵衛次女たよ（15歳）を妻に迎える。

一八八一　明治14　二代助七妻とめ死去（74歳）

一八八四　明治17　二代助七死去（78歳）

一九〇六　明治39　四代助七に三男繁三（後の五代助七）生まれる。

一九〇七　明治40　十一月　日露戦争の影響で延期されていた越後屋創業百年祭執行。

一九〇八　明治41　十一月のお品書き　どぜう鍋六銭　、どぜう汁一銭五厘、鯨汁二銭五厘、なまず鍋十五銭、なまず汁五銭、お酒七銭、御飯四銭、同半人前三銭。朝七時から夜八時まで営業。神田市場帰り百姓の朝飯賑わう。

一九二三　大正12　九月一日関東大地震で越後屋全焼。

一九二四　大正13　繁三　府立三中卒業。進学を断念させられ店業の見習い始める。この頃、どぜうの仕入れは農村地帯の小松川の清六が前四貫後四貫振分天秤にて届ける。千住の問屋からも仕入れた。

一九二七　昭和2　十二月駒形本店の再築が竣工し営業再開。この頃の従業員30人。店主、番頭、煮方、盛り方、裏番（木炭）、中番（味噌摺り）、他に下足番など。朝五時全員起床、夜八時閉店。年中無休。従業員の休暇は二カ月に一日。一日の客千人を超すと大入袋が配られた。

一九二八　昭和3　三月五日四代助七（七三郎）死去（71歳）繁三が五代助七を襲名する。この年駒形橋が完成する。

一九三五　昭和10　繁三（30歳）が京都の本田白味噌醸造の次女三輪栄美と結婚。

一九三九　昭和14　繁三の次男孝之（後の六代目助七）生まれる。

一九四一　昭和16　生活必需物資統制令公布。

一九四二　昭和17　食塩、味噌、醤油は配給通帳、衣料品は点数切符制となる。虚弱体質の孝之は母栄美と葉山の別荘へ転地療養し葉山の小学校へ通学する－昭和24年まで続く。

一九四三　昭和18　川魚も物資統制令の対象となり、越後屋は浦安の知人から対象外の蛤を買入れ蛤鍋として売り出す。飲食業統制令により越後屋は雑炊食堂となる。

一九四五　昭和20　三月十日の東京大空襲により越後屋全焼。店の人は助かる。九月葉山にいた栄美、孝之らはアメリカ軍の葉山進駐の危険から逃れて奥多摩に十一月まで避難する。その後葉山に戻る。

一九四六　昭和21　四月疎開先の葉山の舟小屋を買入れて解体移築し駒形に仮店舗を構える。

一九四七　昭和22　戦後初めてどぜう鍋を売り出す。店業活気がでない。

一九四八　昭和23　五代目夫人栄美の発案で初めて柳川鍋を売り出す。好評。この年両国花火が復活した。

一九五一　昭和26　越後屋の店業軌道に乗る。一月二十五日「浅草十二会」の会合が「駒形どぜう」で開かれ久保田万太郎、浜本浩、藤山一郎、玉川一郎、益田喜頓らの多彩な顔ぶれが集まり、以来久保田万太郎先生と懇意になる。

一九五二　昭和27　五代目助七襲名披露宴で岩井半四郎の舞などあり。新東宝映画「朝の波紋」の駒形どぜうロケあり、高峰秀子、池部良らが来店す。十一月より"はとバス・夜の東京探訪コース"が設定され、駒形どぜうで夕食をとるようになった。

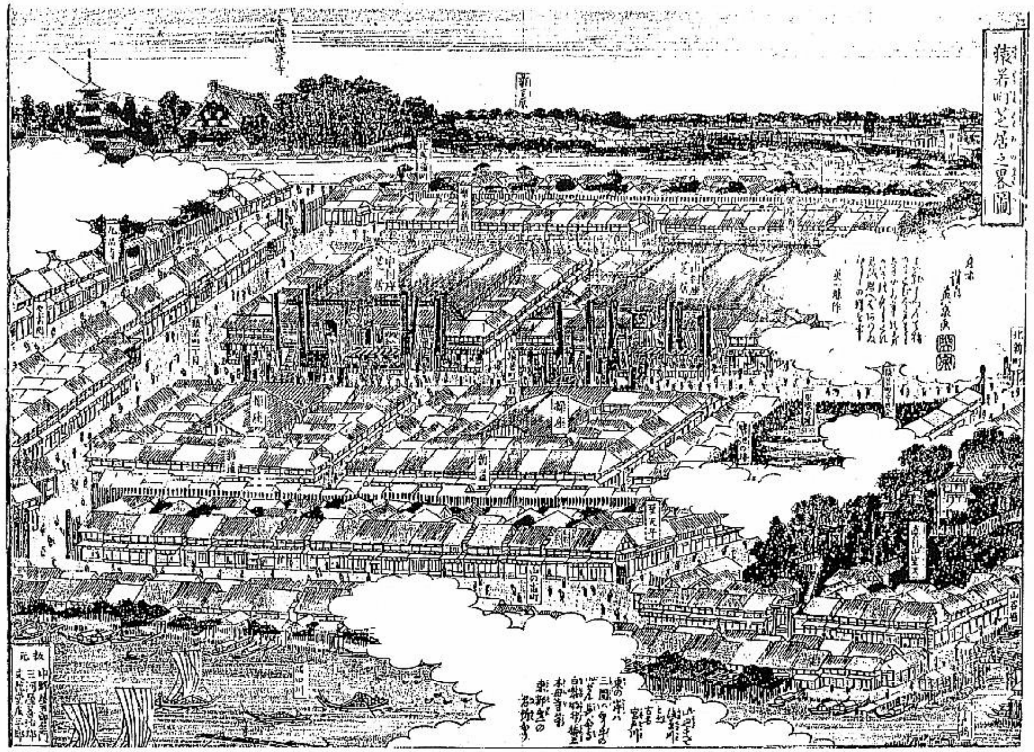
一九五三　昭和28　九月六日～三十日新橋演舞場で永井荷風原作、久保田万太郎脚色演出の「葛飾土産」が上演され"駒形どぜう"の生のセット作りに通う。花柳章太郎、水谷八重子（初代）ら出演。

一九五八　昭和33　映画「駅前旅館」のロケあり。森繁久弥、草笛光子、伴淳、淡島千影らが来店。

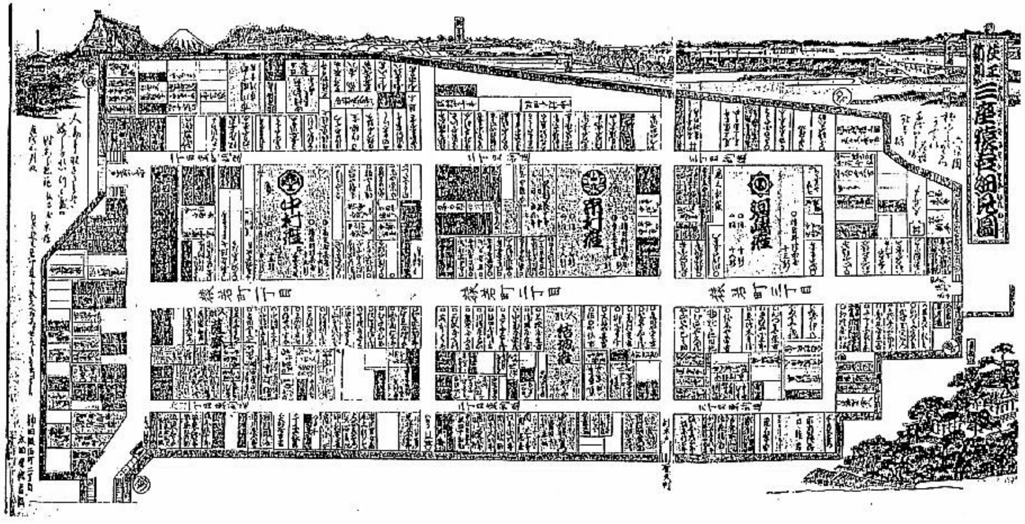
十月十七日金龍山浅草寺本堂落慶。
一九五九　昭和34　新吉原遊廓解散。
一九六〇　昭和35　五月一日松下幸之助寄進による浅草寺風雷神門が九十五年ぶりに落慶す。
五月六日作家久保田万太郎氏死去。
一九六四　昭和39　五月二日駒形本店の本建築が落成す。
一九六六　昭和41　久保田万太郎句碑「神輿まつまのどぜう汁寿々りけ里」が駒形本店前に建立。
一九六九　昭和44　孝之（後の六代目）が銀座浜作本店塩見房太郎長女太枝子と結婚。
一九七二　昭和47　十月十八日駒形どぜう渋谷支店開業。
一九七九　昭和54　渋谷店で「どぜう寄席」第一回開催。
一九八二　昭和57　渋谷店第一回どぜうサロン開催。
一九八三　昭和58　PR誌「どぜう往来」発刊。
一九八四　昭和59　ホノルルに「コマガタレストラン」開店。
一九八六　昭和61　駒形本店にて第一回江戸文化道場開催。
一九八九　平成元　五代目助七（繁三）永眠（82歳）。
一九九一　平成3　一月二十日六代目助七（孝之）襲名披露。
十一月二十五日「駒形どぜう噺　五代目越後屋助七」刊行。
一九九八　平成10　七月二十八日渡辺栄美（五代目夫人）「のれんと柳」刊行。
二〇〇〇　平成12　駒形どぜう越後屋創業二百年。

年表作成基本図書、資料

「駒形どぜう噺・五代目越後屋助七」アイペックプレス社　平3刊
渡辺栄美「のれんと柳」駒形総本社　平10刊
五代目越後屋助七「駒形どぜう噺」小学館文庫　平11刊

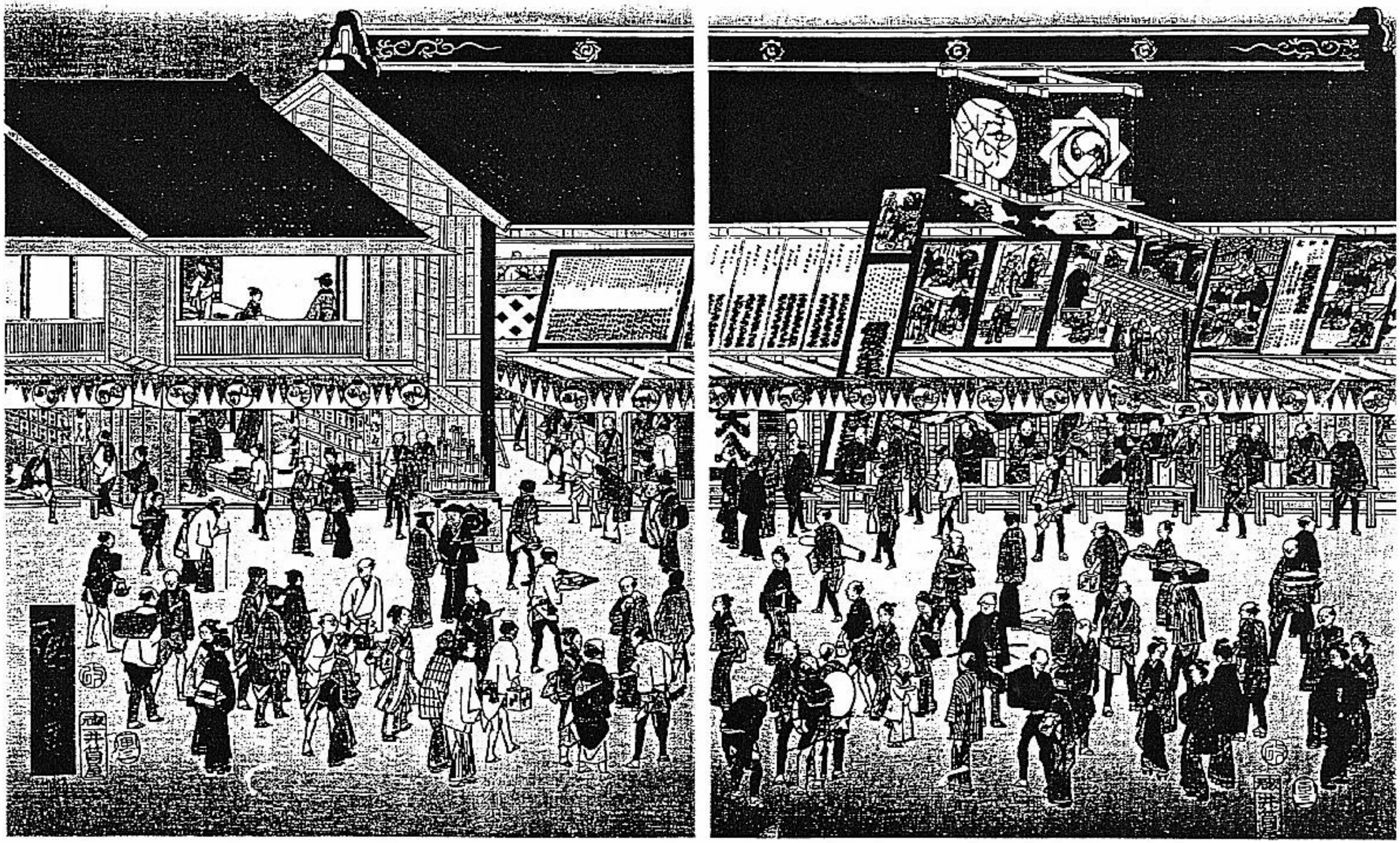


a. 渓斎英泉画「猿若町芝居之略図」



b. 「三座猿若細見図」嘉永 3（1850）

台東区編「ビジュアル台東区史」より



劇場前の人出（広重　東都繁栄の図）

「江戸時代図誌」筑摩書房刊より

「本櫓と控櫓」

歌舞伎の興行権は、中村座、市村座、森田座の三座に限り与えられた特権である。

但し、この三座が興行不能に陥った場合、代って興行する「控櫓」の制度が設けられていて享保十九年（一七三四）、森田座が借財で休座の止むなきに至ったため、その休座中に限り控櫓の河原崎座が興行を代行してきた。この控櫓に対し三座を本櫓または元櫓と呼んだ。

その後、同座の間で興行権の移動が何回となく繰り返されていたが、嘉永三年（一八五〇）、森田座は再興を幕府に願い出た。

本櫓が控櫓に興行権の返還を求めたのだ。

そして、安政二年（一八五五）の安政の大地震で焼失した河原崎座は休座させられ、翌三年、森田座が再興を許され興行を始めたが、同五年、楽屋から出火、焼失したので再建、その機に森の下の田では不吉だというので、「守田座」と改称している。

市川団十郎に不動明王の加護(仮)

享保二〇年(一七三五)市川団十郎と成田不動尊の結び付きは今なを深く、その信心の始まりが、このかわら版に記された有名な話である。享保二〇年(一七三五)二代目市川団十郎は、病気となり大量の血を吐き、死線をさまよう。萬吉栄次という者が成田山の不動明王に願を掛け祈ったところ、団十郎が蘇生し全快したという。団十郎の屋号「成田屋」はこの両者の関係から付けられている。多くの江戸っ子も団十郎同様に、成田不動を信仰していた。

木下直之
吉見俊哉　編「ニュースの誕生」東京大学出版会刊より

市川団十郎に不動明王の加護(仮)

其むかし祐天上人ハ
ふどう明王の霊夢に天
くにの宝けんを呑と夢
ミて悪血をはき夫より
才知人にすぐれかかる
上人とハなり玉へし
とかやしかるに当五月
二十三日夕七ツ時すぎ
御ひゐき市川
団十郎俄に悪
血をはきし事
二升あまりにして
気をうしない
一言のこたいもなかりし
かバひとひとハきやう
てんなしさまさまかいほう
いたし中にもおくり萬吉栄次といふもの髪を
おろし御蔵前なる成田ふどう尊へ大願をかけ日
さんをはしめけるがふしぎなるかな其夜
九ツ時ごろやうやうしやう気つきしかバミなミな
よろこびかぎりなく日にまし全快におもむき
近日出きんもなるべきハ全くふどう明王の利やく
によつて蘇生なしたるものならんと人々おそれ
ざらんものハなかりけるおそるべしおそるべし

浅草の会「浅草芸能伝」より

安政六年七月
浅草猿若町　市村座筋書
勧進帳
弁慶　河原崎権十郎
(九世市川團十郎)
(初役)
富樫　四世市川小團次
義経　岩井粂三郎

中田節子著「広告で見る江戸時代」角川書房刊より

敬誠院浄延信士・八代目団十郎

八代目団十郎死絵

死んでも宣伝された役者人気

死絵（しにえ）とは役者が亡くなったとき、追善を兼ねて売り出された浮世絵のこと。八代目団十郎は安政元年（一八五四）に、大人気のさなかの三十二歳のとき、旅先大坂で自殺した。原因不明の突然の死であった。歌舞伎は庶民にとっての夢であった時代、残されたファンの嘆きはいかばかりであったろうか。死んでますます人気が沸騰したであろう団十郎の死絵の刊行は、百種とも三百種ともいわれる。スターの死はこの時代にも商売となっていた。また、これだけのカリスマ性のある役者があちこちで果たした広告効果は大変なものだったと想像できる。

「江戸のアイドルたち」

嘉永七年（一八五四）八月、梨園のプリンス・八世市川團十郎が大阪で自らの生命を絶った。三十二歳である。理由はわからない。八世は[illegible]と時代・世話いずれの役にも[illegible]していたが、とりわけ「明烏[illegible]濡衣」で坂東しうかの浦里を相手に時次郎。「源氏模様娘雛形」（田舎源氏）の光氏。「児雷也豪傑譚語」の児雷也。「与話情浮名横櫛」で梅幸（四世菊五郎）のお富、鶴蔵（三世仲蔵）のこうもり安、を相手に切られ与三郎などがその特色ある風姿を生かし絶賛された一代の当り役である。

その頃に流行したハイヨ節の替唄に

「にがほ豊国、やくしゃは小團次、ハイヨ　とうじさくしゃはみなさんのう川竹、ひいきはたいそく」

というのができ、芝居町と云はず、茶屋と云はず大流行をきたし、横町の子守児までが口にしたという。

役者似顔絵で人気の浮世絵師・豊国、役者は四世市川小團次、作者は河竹黙阿弥（当時は新七）、それに、清元の延寿太夫が当時、江戸のアイドルであったという。

初代藤浪與兵衛（文政十二年～明治三十九年十月十四日）

二代目（慶応元年～大正十年二月十五日）

三代目（明治二十四年～昭和二十七年十二月二十四日）

ありし日の四代目藤浪與兵衛

土蔵の歴史

やがて、我々は、三月十日の東京大空襲をむかえることになる。この日の惨状はすでに多く語られている。

その夜、いつものように地下室に入ったものの、絶叫する伝令の声を交えて、外の空気が異常なことに気づき、私が飛び出して見た。五十メートル程離れた花川戸の要潟のとなりに既に火災が発生し、猿若町の空は一面夕焼けのように明るかった。これはいかん、と思った。父は即座に「逃げよう」と怒鳴った。早速、土蔵の戸前を閉め、梯子を掛け、入念に粘土で目張りをした。そして家族四人と、小川、三橋（当夜の宿直）計六名は外に飛び出し、逃げ出した。

率直にいって、私はまだ逃げるのは早いのではないか、といううしろめたさを瞬間感じた。

防空演習の盛んだった猿若町の人々は、まだかなり消火作業の準備に従っていた。当時、消火活動という防空活動は、市民の闘いの場であった。また、空襲による火災は消せるもの、空襲は恐ろしいものではないという教育が、隣り組を通じておこなわれていた。とくに下町っ子は、江戸の火消しの伝統、といっては表現が飛躍するが、山の手の住民より、はるかに防空演習には忠実であったようだ。しかし、三月十日の大空襲は、そういう固定観念を吹きとばしてしまった。

永井龍男氏は、「大震災の中の一人」という随筆の中で、震災の思い出を綴り、「東京市民は、その頃から火を消すという行動を捨ててただ逃げる道を選んだ」と述べているが、震災の体験がしみ込んだ父は、とにかく「ただ逃げる道を選んだ」といえる。

憲兵屯所の角で、父は一度立ち止まり、焔の照り返しで赤褐色に不気味に染まった我が家と土蔵を振り返った。「早く行こう」と私はせかした。ゴーゴーという焼夷弾の音が聞こえていた。上空低く飛ぶB29の赤光りする編隊が、時折煙雲の間から低く見えた。言問通りの、あちら側の火が、強風にあおられ、こちら側に焔がはってきて、乾いた私の外套を焦した。全員、言問橋に逃げた。橋の上は人とリヤカー、荷車と、荷物でいっぱいであった。「橋の上なら大丈夫だろう」と私はいった。父は「ダメだ、震災の時、橋は焼け落ちたんだ！」と怒鳴った。

我々は三囲神社の境内の入口、言問橋のたもとにうずくまった。隅田川越しに、花川戸が焼け、観音様の方まで一面に火焔に包まれた浅草が見えた。と、一瞬のうちに、ぼっ、ぼっ、ぼっ、と橋の上の人々、荷物に火がついた。橋はたちまちのうちに火焔のアーチになった。橋から焔に包まれた人が、隅田川に飛びこむ姿も見えた。隅田川の上を、大きな屋根が、形のまま燃えて流れていった。

朝になった。私達は何はさておき、累々と、足のふみ場もない程散乱する、黒びかりして焼け焦げた人間の死体をよけながら橋を渡り、猿若町へと急いだ。

土蔵は、瓦礫と焼死体のくすぶる焼土の中に立っていた。漆喰の壁はほとんど落ちていたが、時折煙に包まれながら傷だらけの黄土の姿を残していた。父母は、くずれるようにしゃがみ込んでしまった。

土蔵は、また、歌舞伎の小道具を私達に残してくれたのである。

私たちは、無言のまま、散乱する死体の間を去った。途中、馬道の大通りの手前の産院の前に散らばった死体の中に、男女の識別もさだかでない黒焦げの死体があった。両手両足が宙をつかみ、その足元に、これまた炭のように焼けこげた新生児がころがっていた。

一週間程経って、私は従業員五人程と一緒に、土蔵の戸前を開け、中に入った。土蔵は火をくぐったあと、すぐ扉を開けてはならない。泥造りの、観音開きの厚い扉の一段目に、何ケ所か、煙が入った跡があった。が、中は冷え冷えとして、全く焼ける前と変わらなかった。紙一枚焦んでいなかった。が、大きい水瓶二つになみなみと張られた水は一滴も残っていなかった。

周囲は、三月十日の朝のままであった。土蔵のまわりには人っ子一人、犬一匹住んでおらず、広大な焼土の住人は、我々と浮かばれぬ無数の怨霊のみであった。

上野の森が目の前に見え、こんもりした待乳山がすぐそこにあった。浅草のデパート、松屋からは、しばらくの間煙が吹き出していた。焼土に住む夜は恐ろしかった。

私達は十日程焼土に泊まりこんで、埼玉県へ小道具を運び出す作業をはじめた。交通機関もほとんど全滅の状況であったから、運搬のため埼玉県で船を雇い、隅田川を利用した。

その後間もなく、八月十五日の終戦を迎えることとなった。

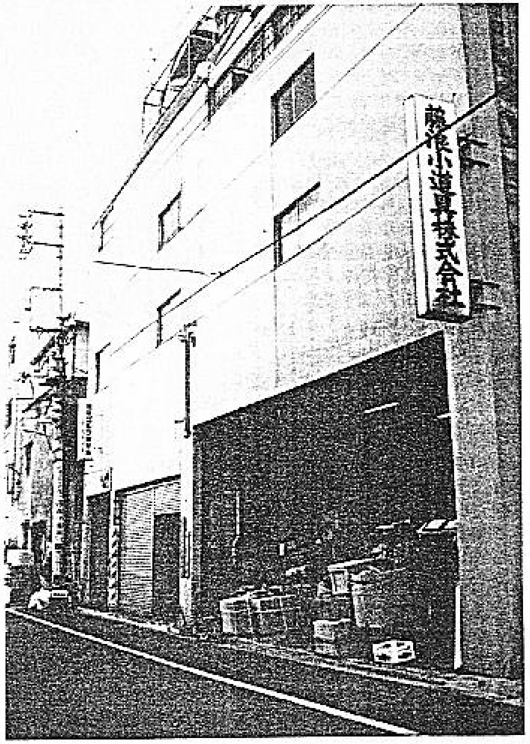
すぐに焼土の東京には、演劇再興の気運が高まってきた。事実、偉いもので、終戦から間もない九月一日、焼け残った東京劇場で、猿之助一座が早ばやと、戦後の初公演をおこなっている。その時の演目のひとつに「東海道膝栗毛」があるが、すさんだ人々に、せめて笑ってもらおうという、歌舞伎人の精いっぱいの心意気をそこに見ることができる。

そして、これが、戦後小道具業再開の初日であった。

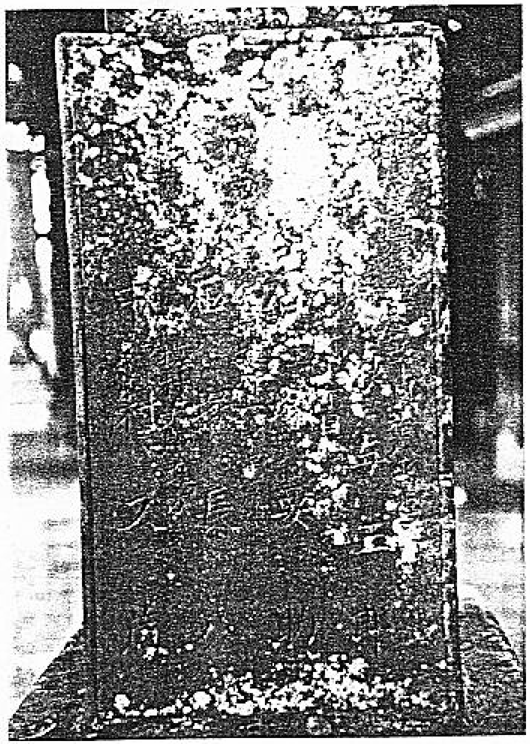
多量の小道具を失ったことは震災同様であった。が、木材ひとつ、釘一本自由にならぬ極貧の戦後の世相の中で、小道具業の再建は、震災のときとは比較できない程の困難があった。これは、日本中が経験したことでもあった。

蒔絵物の置き場、三階

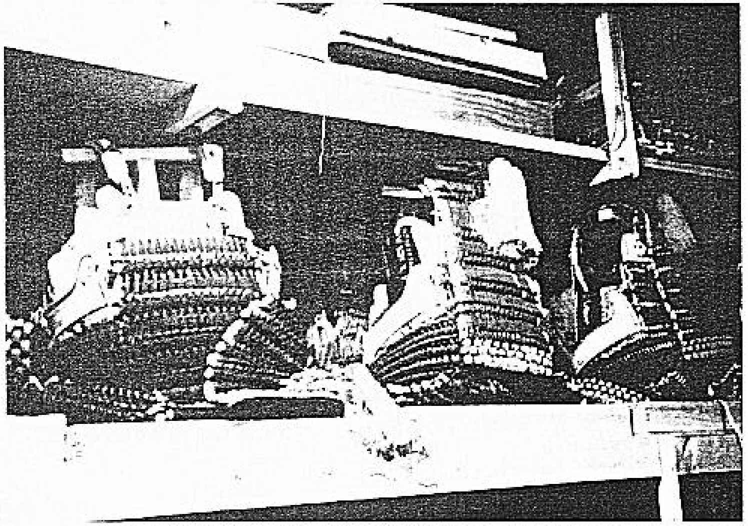
四代目藤波与兵衛著「芝居の小道具」日本放送出版協会刊より

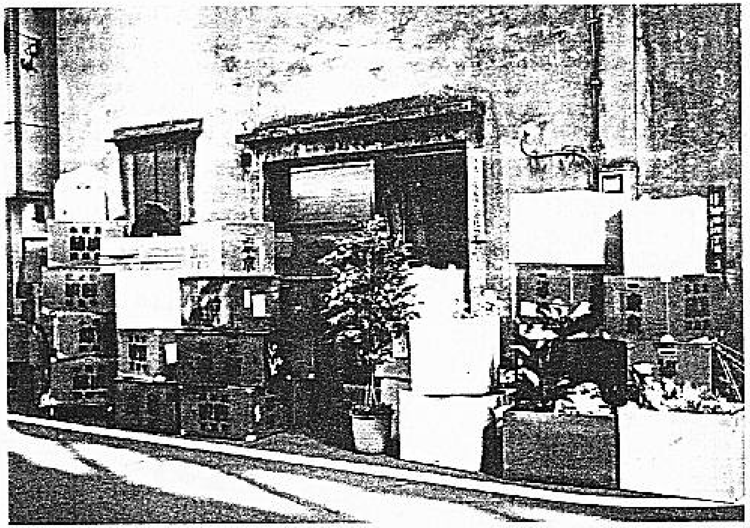


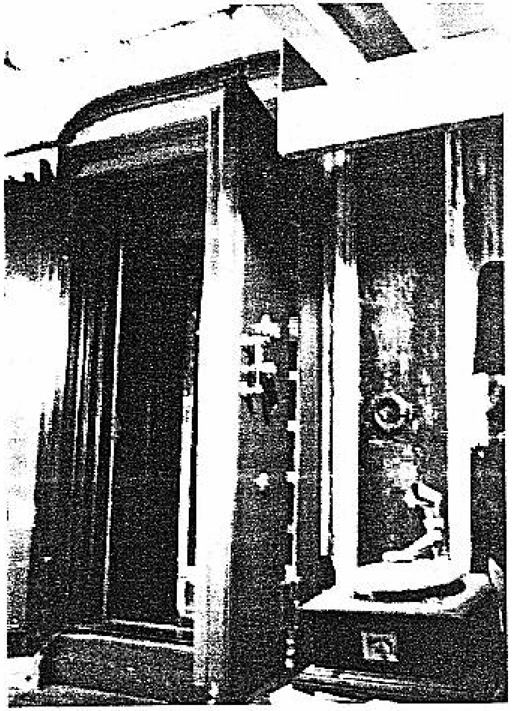
藤浪小道具(株)本社・倉庫



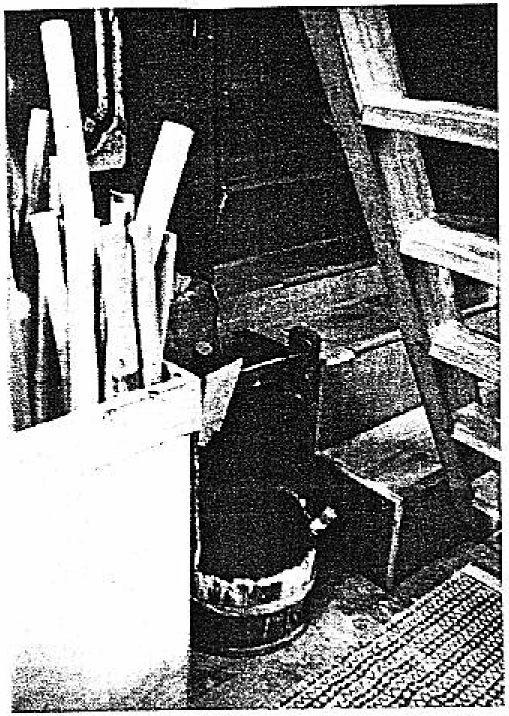
越谷・千疋伊南理神社の狐像・二世藤波与三郎他三名寄進



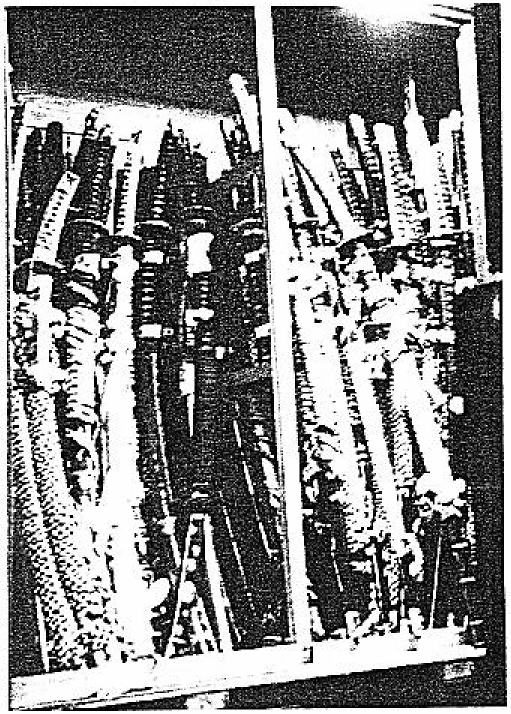




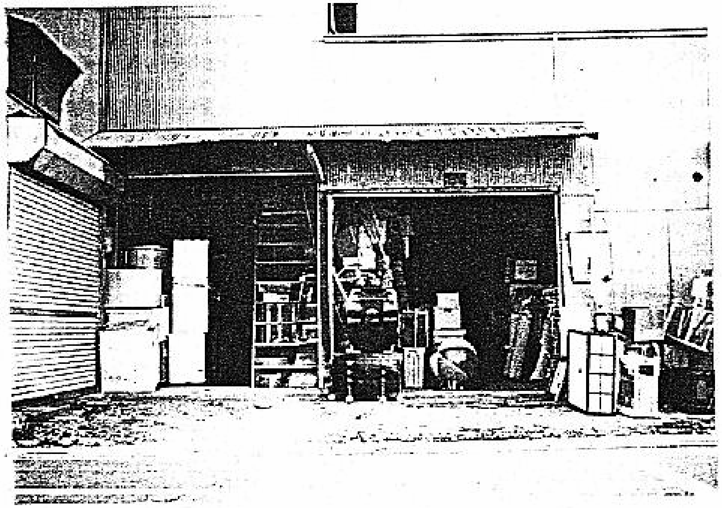
藤浪小道具(株)の土蔵入り口



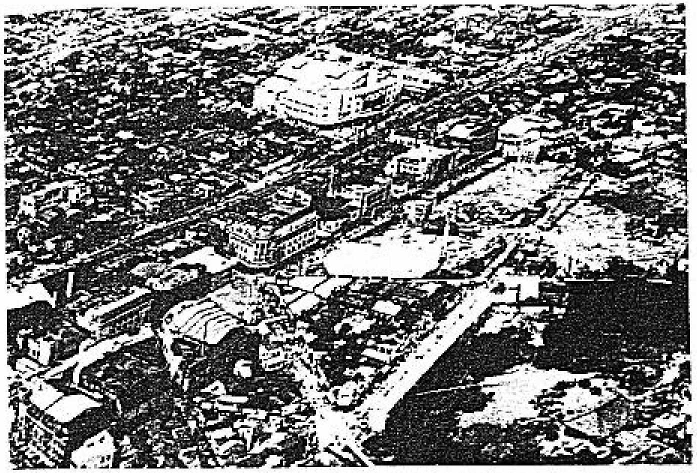
土蔵入り口の目張り用粘土桶



土蔵内の刀剣



藤浪小道具の蒲生倉庫



昭和35年頃の浅草六区映画館街と国際劇場

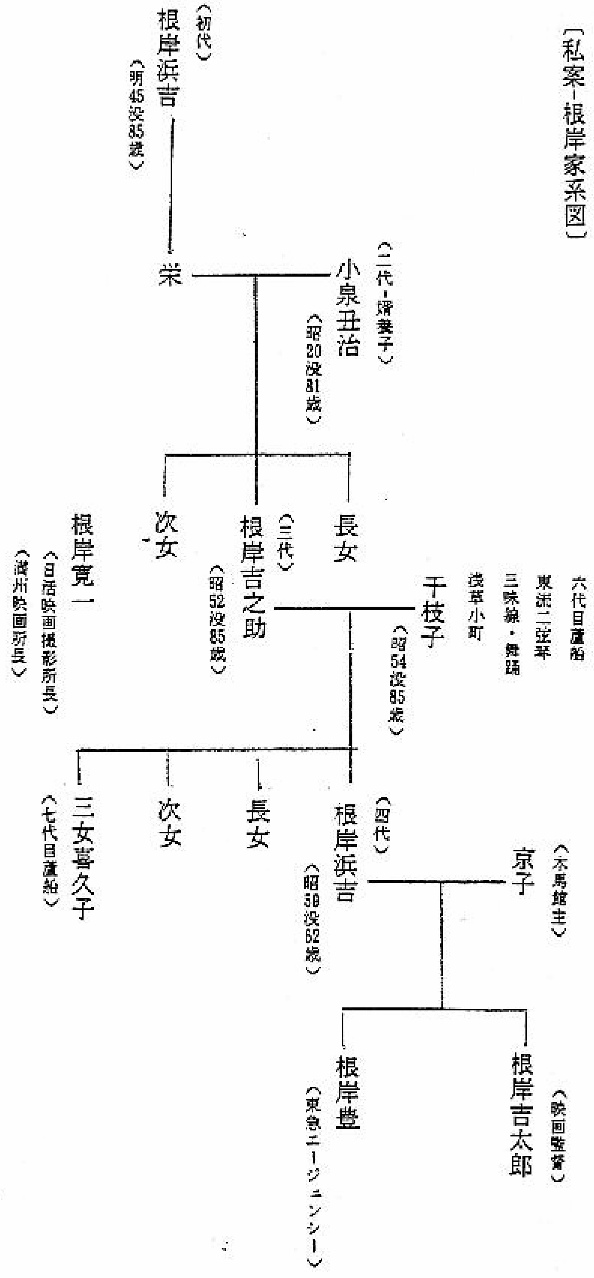
〔参考資料〕

浅草六区と根岸興行部

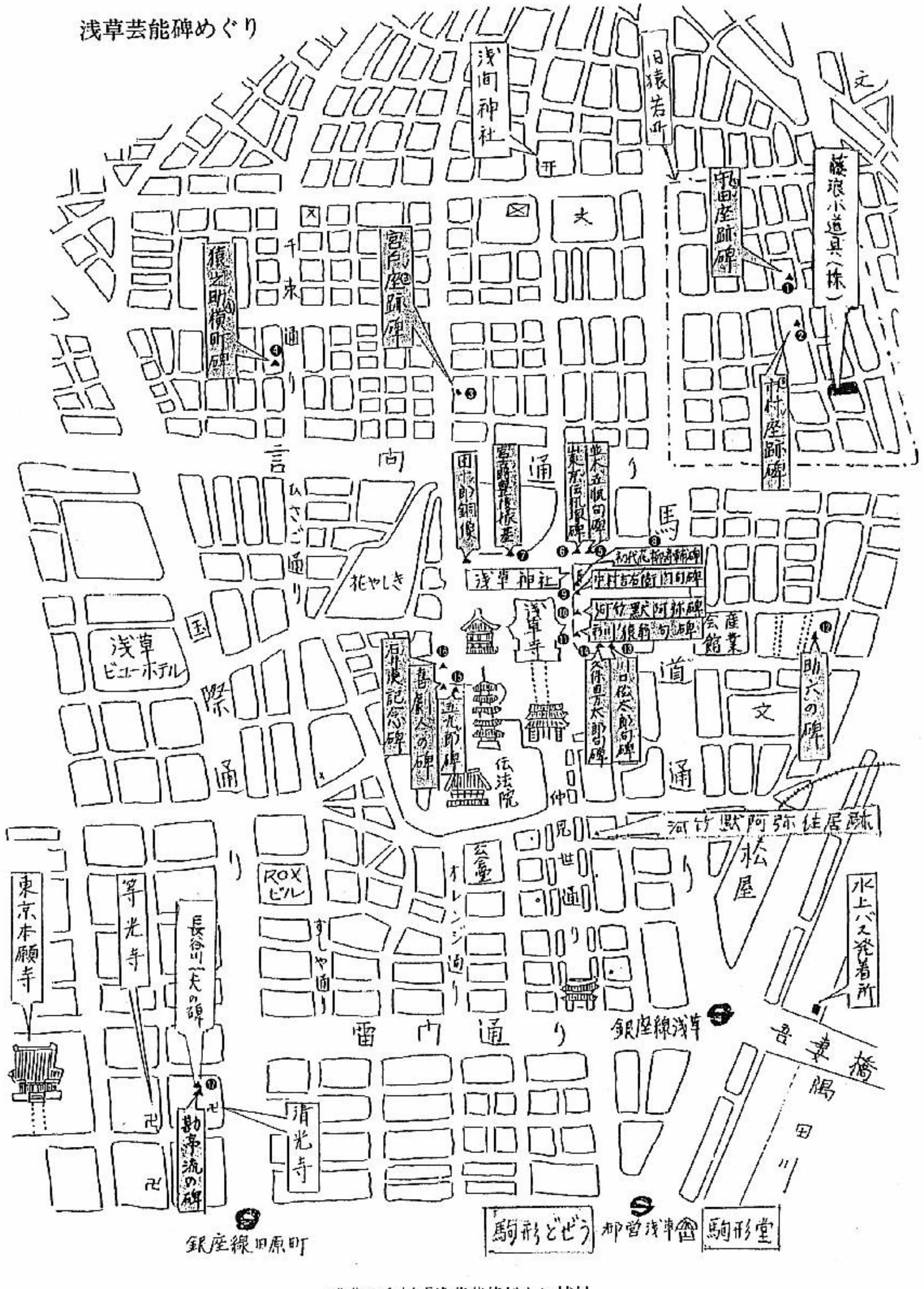
明治15年　浅草田圃の埋立工事・大池（瓢箪池）の開削。
17　浅草公園を六区画に分け第六区は一号地～四号地に細分。
18　浅草寺奥山の見世物小屋が第六区一号地に移転。
この頃　以後見世物小屋は第六区に集中。
茨城県筑波郡の小田村の豪農の息子根岸浜吉は縁故関係にあった森田勘弥を頼って上京し新富座に仂く。やがて人が無駄にする鰻の頭や肝を串にさし美味しいタレをつけ香ばしく焼いたのが安くて栄養あると評判。
その利益で浅草六区入り口に観覧車を建設し大当たり。
その利益で芝居小屋の立ち見席の権利を手にし興行にのりだす。
20　根岸浜吉　牛込筑土町で営業していた〝道化踊り〟の浅草六区での営業許可あり常盤座（木造平屋建て）を建設。
29　常盤座を煉瓦造二階建てにする。
44　常盤座の右側に金龍館を建設。
45　常盤座の左側に東京倶楽部を建設。
大正2年　五月七日初代根岸浜吉没85歳。
株式会社根岸興行部設立。兄弟会社として常盤興行・日本興行を設立。
根岸興行部は前記三館のほか公園劇場・観音劇場・富士館の経営権をにぎり、後には奥山に木馬館を建設。回転木馬は昭和33年末まで続く。
5　二代目丑治は金龍館（オペラ）・常盤座（演芸）・東京倶楽部（映画）の三館を廊下で結び〝三館共通券〟を売出し大好評。
一般の劇場　大人七銭
三館共通券　大人十銭　二階は二十銭
6　常盤座で浅草オペラを上演。
9　「根岸歌劇団」を創設。
12　九月一日大震災で三館とも焼失。
十月木造建てのバラック建築。
昭和2年　十一月木造の三館とも類焼す。
4　七月常盤座鉄筋三階建て完成。
6　十二月金龍館・東京倶楽部鉄筋三階建て完成。
しかし三館とも経営権は大阪から上京した大谷松太郎竹二郎兄弟の松竹に渡る。

浅草の会編「浅草芸能伝」「浅草双紙」根岸喜久子「おもいつくまま」により

〔私案－根岸家系図〕



浅草芸能碑めぐり



浅草の会編「浅草芸能伝」に補足

新門一家、市村座へ暴れこむ

相模屋政五郎は人呼んで相政。日本橋箔屋町に住んで、文化のころから明治にかけて、諸家諸侯に人入れを稼業とし、土木の元締めをし、ひと声かけるとすぐに千三百余人の子分が集まったという。古い表現をかりるなら、強きを挫き弱きを助け、身を殺して仁をなすという、侠客であった。

新門辰五郎

勝介とは家もすぐ近く、また年も近く（相政は文化五年生まれ）、人を助ける稼業というところも似て、いつとはなしに親しい関係をつくり出していた。

文久二年（一八六二）の六月なかば、浅草猿若町の市村座で喧嘩が起きた。地元を縄張りとする新門辰五郎の子分三人が、酔った勢いで木戸を通ろうとして、「お茶屋は？」「野暮なことをきくねぇ」「たとえ一幕見でも、木戸銭は払って頂きましょう」「なにをぬかす、おれたちゃァ新門の若えもんだ」というような小さなことが発端で、子分たちは叩き出される。こいつを仲間たちに輪をかけて話したところから、四、五十人の新門一家が、翌日の正午の鐘を合図に、ドッと市村座へ暴れこんで、芝居どころか木戸から大道具、櫓までぶちこわした。芝居側はすぐその筋へ訴え出る。下手人の追及が始まる。辰五郎の耳に入ったのはそれからである。

急をきいて、新門にゆかりの顔役たちが、市村座に集まり、圧力で芝居の連中に和解をすすめた。芸人の弱さで一時はまとまりそうに見えたが、櫓代（櫓の責任者）の万吉というのが骨のある男で、

「櫓は芝居の生命でござんす。たとえ金ずく顔ずくでも、筋の通らぬことァ万吉、絶対に承知は出来ません」

と、ガンとしてきき入れない。

弱り果てたのは座頭の坂東彦三郎である。ちょっと中座する形で家にもどり、実父の亀蔵と相談する。見渡した親分衆の中に、箔屋町の元締（相政）と先生（勝介）がいない。この二人に仲に入ってもらうより、もはや打つ手はないということになった。そうして二人に頼み込んだ。

むずかしい仲裁だが、新門のためにも芝居のためにも、捨ててはおけない。勝介は相政と相談し

て、市村座へ駆けつけた。
相政はまず万吉に対し、ジックリと説得した。さすがの万吉も、キチッと膝をそろえて、
「よろしきよう、おまかせいたします」
と、頭を下げた。うなずいた相政は、即座に大道具の長谷川勘兵衛を呼んで、
「親方ァ、すまねぇが、櫓も道具も、元通りになおしちゃァくれめぇか。なァ、芝居は江戸ッ子皆の衆のものよ。一ン日も早くあけてくれって、みんなが待ってらァ。金にァ、決して糸目はつけねぇぜ」
「へぇ、承知つかまつりました。おまかせ下せぇ」
返事にも気合がこもる。そのセリフを受けるように、勝介も、
「新門のお身うち衆にも、芝居の衆にも、ズーッと申しあげます。怪我人のほうは、及ばずながら、この名倉が引きうけさせて頂きましょう」
きっぱりと宣言した。
ホッとした気分が、満座をつつんで、
「ありがとうさんでございます」
「万事、おまかせ申しあげます」
「さすがは、箔屋町のご両所……」

「お役目、ごくろうさんでした」
いろいろな声が四方からとんで、一件は無事落着した。
長谷川は、大工や仕事師を動員して、夜っぴいて、木戸と舞台を元通りにした。あくる日は一ン日がかりで、万吉の気の向くままに櫓の修繕もすませた。
相政はすぐお上へ運動して、捕われた若い衆たちを願い下げにしてもらう。勝介は怪我人の手当てに、全力を集中した。
勝介の株は、玄人の中でもグンと上がった。

江戸橋の上の手打ち式

このような大喧嘩が、たったそれだけで解決したわけではない。日を改めて手打ち式が行われることになった。
関係者の数を踏んでみても、市村座側は頭取から茶屋の出方まで、新門側も子分の端々まで、それに仲裁に入った親分、顔役衆とその身内から子分まで……総勢をひっくるめると、千人ではきかない。
ひろい江戸にも、とてもこれだけの人数を収容出来る座敷はない。また家もない。そこで日取り

と場所がいろいろ選ばれたあげく、ときは八月十五日の八ツ（午後二時）、ところは日本橋の四日市ときまった。四日市は日本橋から江戸橋にかけてひろがる広場で、さまざま市が立つ。とくに年の暮れには万歳市（三河万歳の太夫が、才蔵役を雇うための市）までひらかれるところとして知られる。江戸のどまン中という場所柄もあるが、相政と勝介の住むところ……つまり仲裁人の地元という配慮も当然あったのである。

うわさは、たちまち江戸中にひろまる。物見高いは人の常。八ッの合図を待ちかねたように、あちこちから四日市めがけて集まった人たちは何千人……いや、何万人といってよいほどで、その中には千住から、わざわざ伴を連れて来た、弥一の顔もあった。

江戸橋をはさんで北の側には、新門辰五郎とその子分たちがおよそ五百人。南の側には市村座の座元市村羽左衛門、そして坂東彦三郎親子、櫓代の万吉をはじめ、裏方一同まで約二百人。

仲裁に入った下町の……魚河岸、新場、江戸橋、日本橋、小網町、新川、大川端、築地、鉄砲洲、佃島、芝浦、金杉浦、高輪、両国、柳橋、代地、浅草、聖天町、山之宿、田原町、馬道といったそれぞれの、親分衆や鳶の頭たちが、南と北にざっと五百人、紋服に威儀を正して、ならぶ。相政と勝介も、むろん多くの身内を従えている。燃えるような炎天が、その上にある。

やがて、ざわめきのなかを、十人ほどの紋付姿が、南から北からと、同じような歩調で、江戸橋の中央へ進む。中に一人坊主頭がいる。それが〝中橋の坊主〟で通る名倉勝介であることは、みん

な知っていた。度重なる喧嘩やもめごとの仲裁を買っているうちに、奉行所に対する責任が生じて、数年前バッサリ髷を切って以来の〝坊主頭〟である。

橋の幅一ぱいにならんだ一同は、南と北に頭を下げて、そうして役人のいる北側にもう一度礼をしておいて、一歩前に出た政五郎が、おもむろに口を切った。

「炎天もおいといなく、本日お集まり頂きました皆さまに、不肖、この相模屋政五郎申しあげまする儀は……」

と、騒動のあらましをのべ、示談和解のいきさつを説明しておいて、一段と声を張って、

「しかしながら、万が一、新門のご一統、ならびに猿若町の芝居の衆に、いささかの宿恨でも残りますれば、解決また片手落ちでござりまする故、本日ここに、お役人さま、お立会いの上、かかわりの者相集い、大江戸八百八町の皆さまがたの前にて、シャンシャンシャンの手打ち式、無事打ちあげといたしたく存じまする次第……」

と、よどみなくのべ終わる。どよめきが揺れ動く中、続いて勝介が一歩出て、

「お役不足は承知の上ながら、今回の仲裁人の端くれに名を連ねました中橋の坊主、勝手ながら千秋楽打ち出しの手締めの音頭、取らして頂きますれば、どうぞ皆々さま、お手を拝借……」

と、三本締めの音頭をとった。シャンシャンシャン、シャンシャンシャン、シャンシャンシャンの手拍子が川面をゆすり、それに続いてやんややんやの喝采が、天に吹きあげた。

もし時代劇にでもまとめるならば、このあたり最も感動的な場面となるだろう。

人垣の中で、この光景を見とどけて帰った弥一は、

「あのときの、箔屋町の叔父さんは、そりゃァ、千両役者だったよ」

といつまでも、家人に語ったという。

私も、つい先日、ちょっと買物ついでに、江戸橋のあたりをあるいて見たが、もうとてもそんな絵を思い浮かべるような雰囲気は、どこにも残っていなかった。

若い弥一にとって、この勝介の千両役者ぶりは、よほどの感動であったようだ。

千住へ来る患者たちの中でも、何人かの人が見て来たらしく、勝介の評判はにわかに高まった。これはいや応なしに市蔵の耳にも入る。

結局、弥一が父市蔵を、熱心に説得して、勝介の勘当がゆるされることになる。市蔵と勝介の父である良音は、前の年の文久元年四月二十一日になくなっている。

「では、三回忌がすんだら、勝介に出入りを許してもいい」

そういう内諾が、市蔵の口からポンと漏れたのがきっかけとなって、千住の火消しの頭が仲介の労をとり、長い間の勘当がゆるされたのである。

わが家の記録によると、

「後年詫びを許され、そのはじめて千住宅へ赴く時、その間あっせんの労を執った江戸火消し四十八組は、ことごとく勝介に同伴したので、一行、延々数十町にわたったという」

とある。千住大橋から名倉の家まで十七、八町はある。その間切れ間なく、江戸のいろは四十八組の火消し衆が続き、その先頭集団の中に、勝介が晴れやかに胸を張って行く姿は、ちょうど凱旋将軍のようであったろう。

この中には相政も、新門辰五郎も当然いたであろうが、名前が出てこないのは、迎える側が千住の名倉という堅気の医者であるため、やくざッ気を正面に押し出すのをわざとさけたためではないだろうか。

文久三年……つまり〝芝居の喧嘩〟の翌年だから、当主の市蔵は四十六歳、弥一は二十五歳であった。勝介はもう五十を二つ、三つこぼれた年になっている。

名倉弓雄著「江戸の骨つぎ」毎日新聞社刊より

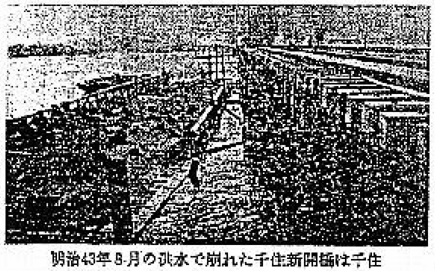
泥水の中を、むすびの見舞い

謙蔵は、学校を出て、医師の資格をとって、すぐ玄関に座り、嫁をもらって身をかためる。二十二歳のときというから、明治二十年である。祖父の市蔵を失ったときが二十五歳。父弥一が死んだときが三十七歳。男の脂の乗りざかりである。

そのころ……明治三十年から四十年にかけてのころ、千住仲組にあった足立銀行というのがつぶれた。明治二十三年、三十年、三十四年、四十年と経済恐慌が起こり、弱少資本の銀行は経営不能におちいったことがある。おそらくそのどれかのときであろう。謙蔵もかなりの資本を投じていたらしく、担保の土地などを手に入れた。だから妙なところに謙蔵名義の土地があり、大正十五年にいまの東京電力……そのころの東京電灯会社が建てた例の〃お化け煙突〃の場所も、たしか名倉の土地だったときいている。東武鉄道の北千住駅から、裏道を抜けて行くと、『他人の土地を通らずにウチへ帰れる』とさえいわれたのもそのころだ。

千住は、あまり地震や火事の被害はないが、水害だけは宿命のようだった。

明治に入ってから……謙蔵が生まれてからの、足立区関係の水害記録を見ても、明治十年十一月、十一年九月、十三年十月、十七年九月、十八年七月、二十二年九月、二十四年九月、二十九年九月、三十年九月、三十五年七月、三十九年一月、同七月、四十年八月、四十三年八月……と、ほとんど長雨や台風のたびに大きな被害を受けている。



明治43年8月の洪水で崩れた千住新開橋は千住鉄橋に衝突してやっと止まった

そのもっとも記録的な被害は、四十三年八月の洪水だった。八月に入って降り続いた豪雨は、利根川が栗橋で二十一尺五寸九分（約六・五四メートル）、荒川が古谷で二十八尺二寸（約八・五四メートル）、権現堂川が権現堂村で二十三尺二分（約七メートル）、江戸川が西宝珠花で二十一尺七寸五分（約六・六メートル）という異常な増水を示し、至るところで堤防がこわれた。十日にまず六郷川が決壊し、十一日には荒川、利根川の堤が数ヵ所寸断され、綾瀬川もくずれて、南足立郡の全部、北豊島郡の北半、南葛飾郡の西半が、アッという間もなく泥水につかった。

〃すりばん〃がはげしく打ち鳴らされ、

「権現堂が切れたぞォ!!」

と、絶叫する声とともに千住一帯に水が押しよせたのは八月十二日の夜に入ってからであったという。〃権現堂（利根川の埼玉県側の堤防）が切れたら江戸は水びたし〃というのは古くからの言伝えで、権現堂は江戸の生命線とされていた。結局このときは、かろうじて決壊を免れたので、被害はこの程度ですんだのだともいわれた。

このとき名倉の家も、庭の二つの池がまず泥水でつながり、庭一面が海のようになり、二つの築山が島のように浮かんだ。庭より数尺高い母屋も水がタタミを押しあげ、そのタタミから二尺ほどの高さに達した。

幸い家人が多いので、手分けをしてまず医薬品を二階へ運ぶ。こういう度重なる水害のための用心に、物置の天井に釣ってある小舟を下ろす。提灯、ロウソクをあちこちに置く。働くだけ働いて、朝になって、みんなハタと空腹に気がついた。飲む水がない、燃やすものがないのである。

呆然としているその日の午後、信じられないような助っ人が、突然現れた。

川向こうの駒形でどじょう屋をやっている『駒形どぜう』の主人渡辺助七である。自分が先頭に立って、心持ち水は引いたとはいえ、印半纏の胸までを水びたしにして、店の若い衆三人とともに、水がめを背負い、むすびと梅干を風呂敷いっぱいに背負って、水見舞いに来てくれたのである。

駒形から千住までは二里に近い道のりがある。途中の千住大橋もほとんど危い。おそらく必死の思いで渡ったことだろう。その川を渡っても名倉まではまだ半道近くある。しかも見わたすかぎりの泥水である。それを物ともせず、わざわざ炊き出しまでして持って来てくれた好意に、名倉の家のものたちは感動した。

『駒形どぜう』は享和元年（一八〇一）の創業という。名倉の業祖直賢の骨つぎ開業より約三十年遅いが、それでも浅草界隈の古舗である。直賢も良音も、市蔵も弥一も、代々の食道楽だから随分足を運んだことだろう。謙蔵もよく家族連れで出かけている。水害の数年前の創業百年祭の折りには謙蔵はむろん祝いの品を贈っている。

そんなこんなの、ゆかりを大事にする江戸ッ子商人の心意気に、謙蔵は泣くほどの感激を味わったのである。

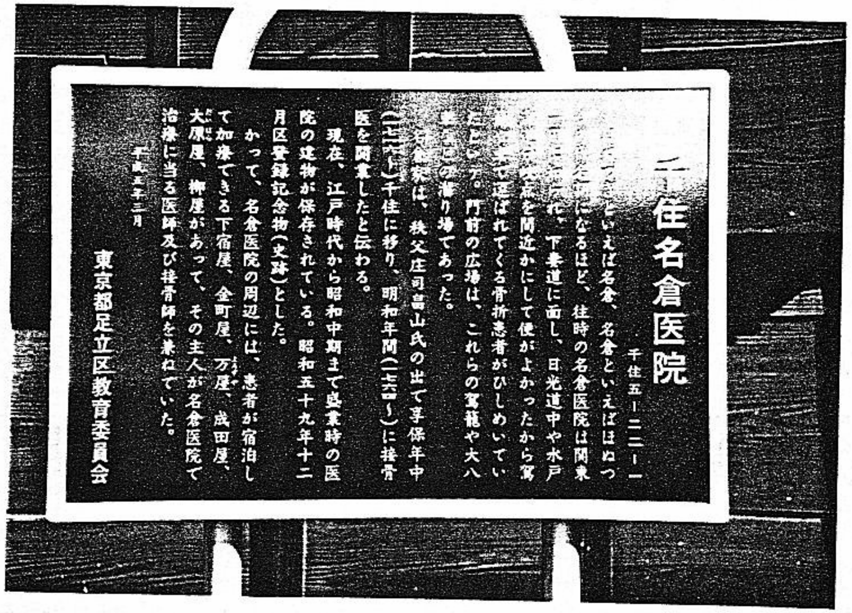
この『駒形どぜう』の水見舞いのときの主人は五代目（昭和三年没）で、今は六代目がやっておられ、私もちょくちょくお邪魔する。隅田川を隔てての昔かたぎの心のつながりを、私も大事にしたいからである。

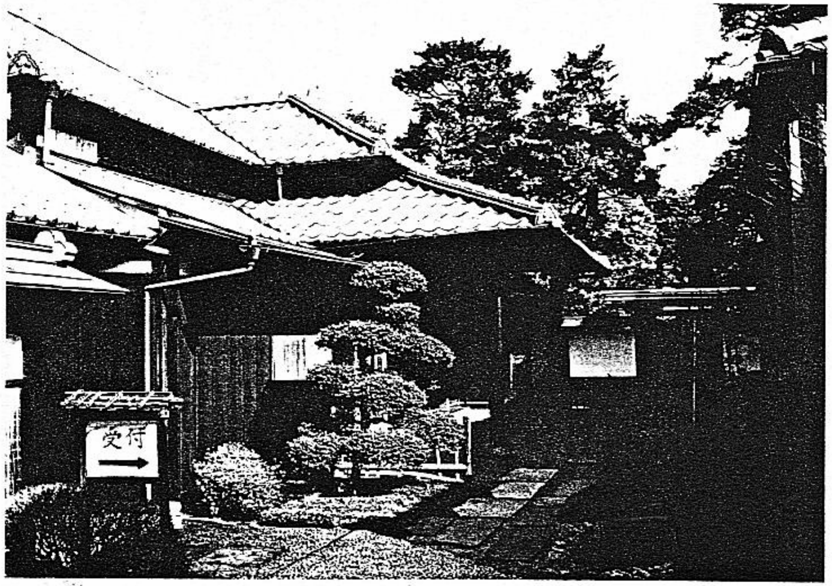
なお、ここのどじょうは、むかし変わらず千住のどじょう問屋が納めているときく。やはり江戸以来の古い家である。

名倉弓雄著「江戸の骨つぎ」毎日新聞社刊より

左折＝奥州道　直進＝下妻道

昔からの名倉門前広場

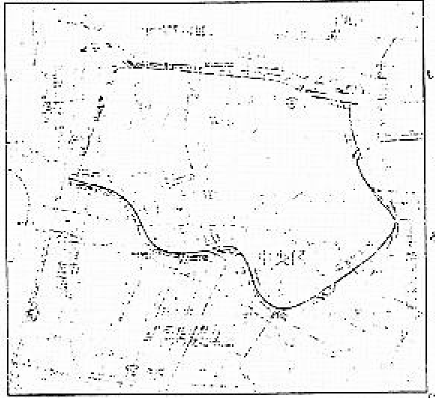




中央左に玄関、正面塀の中が庭園、右の建物は診療棟

⑦日本橋北内神田両国浜町明細絵図（一八五九年）

範囲図



解説

本図は、三版二、四版目の図。初版は、嘉永三年(1850)。二版は嘉永四年(1851)。三版は安政四年(1857)。最終版は明治二年(1869)。

収図範囲は、千代田区・中央区。山手線内側の内神田と外側の日本橋北部一帯。

この図でやっと江戸の下町の商家の出番となる。大名屋敷は大川沿いにかたまっていて一寸異質の感がある。なにせ一日で千両の金がとびかったと言う江戸三千両の一つ、魚河岸を抱えているだけに威勢活気のいい地域。アマ鯵と言われた魚河岸は読んで字の如く日本橋と江戸橋の間の堀の北側に軒を連ねていた。今でいう町名が本船町、長浜町、安針町、小田原町一丁目・二丁目、瀬戸物町の一画である。

日本橋北の室町辺は、江戸開府以来の古町で御城名主の町年寄・樽屋藤左衛門、奈良屋市右衛門、喜多村彦右衛門が住んでいた。喜多村の前のウキヨコウジに蚊帳で名高い「西川」があった。更に、北に進むと神田から筋違御門にでる。御門前の八ッ小路は、両国広小路と同じ火除けの広場である。八ッ小路を東に下がった三河町に、銭形平次が投げ銭をまきくっていた。

八ッ小路から両国広小路までの神田川の土手通りを柳原通りといい、古着屋がならんでいた。

常盤橋御門にそる本町、大伝馬町、横山町を両国広小路に抜ける大通りが日本橋商人のメインストリート。今では繊維関係問屋が軒を並べている。

浜町堀の通油町と通塩町の間の大門通りを南に下ると、明暦大火前にあった旧吉原にぶつかる。松島町がそれである。本来この旧吉原・松島町は堀に囲まれて遊女が外に出来ないようになっていたのだが、本図では、一方のみ堀となっている。この旧吉原も江戸三千両の一つで、日に千両の金が動いたといわれ、紀文・奈良茂も豪遊したとか、ケチだったと言われている。

大川に架かる新大橋は、現在この位置の北に付け替えられ、酒井雅楽頭（姫路）十五万石・松平（越前）下屋敷のところに架かっている。両国橋も同じく北側に移動しており、現在は両国イナリ辺に架っている。

＊日本橋……大川端屋台の店。（ち－う）

＊三越本店……駿河町、越後屋の一号。（ー…）

＊水天宮……安産の神様、戌の日に参拝すると御利益あらたか。有馬家之屋敷。猫が騒動では御猫のアテにもならないか。（ハ－七）

＊明治座……高遠内藤家（浜町）八万石・牧野越中守中屋敷の屋中あたり。昭和二十年三月十日・東京大空襲の折に三千人の人々が地下室に避難して蒸し焼きにされ、空襲後地下室のシャッターをこじ開けたら一陣の風と共に灰が飛び散り、骨一つなかったそうである。（ほ－へ）

＊長崎屋……江戸参府オランダ商館長一行の定宿。鐘撞き人宿、時の鐘の石町の前にあったので、鐘が撞かれる時刻はさぞうるさかっただろうと気の毒。（ほ－に）

＊JR神田駅……上白壁町、上白カベ町あたり。（ち－は）

十軒店人形店

現在の千疋屋総本店

芝居小屋（市村座・中村座）

明治初 西郷隆盛邸

元禄三年の千疋屋（水菓子店）

旧吉原町

千住名倉日本橋分院（文政元年1818 … 知重）

嘉永・慶応 江戸切絵図（尾張屋清七板）

1995年4月20日 第1刷発行

定価1,500円（本体1,457円）

発行所 株式会社 人文社

発行者 近藤和吉

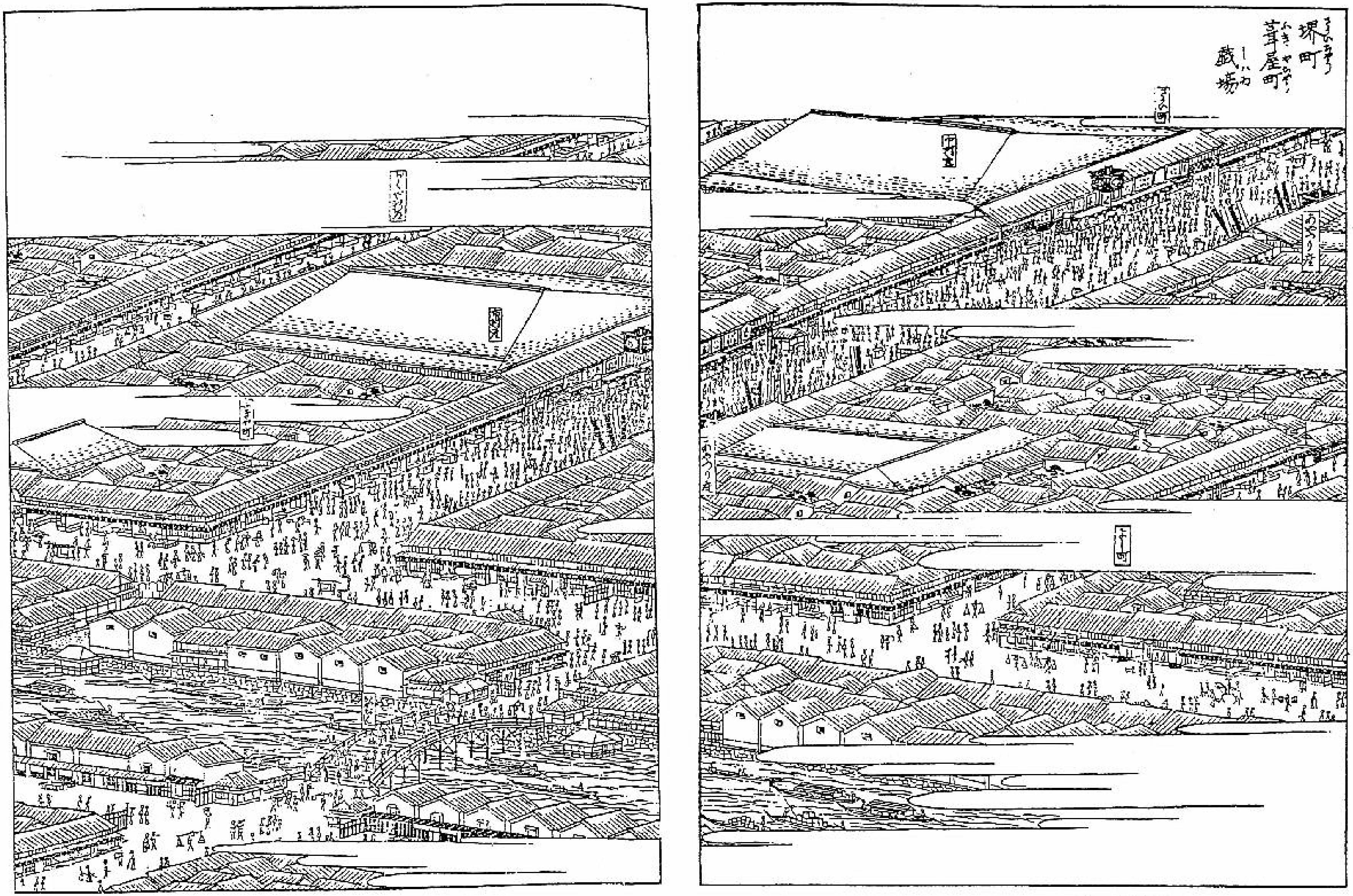
住所 〒101 東京都千代田区三崎町3-1-2

印刷所 凸版印刷(株)

製本所 凸版印刷(株)

※本誌の図版および記事の無断転載を禁じます。

⑦日本橋北内神田両国浜町明細絵図（一八五九年）



江戸名所圖會　巻一

「江戸名所図絵」人物往来社刊より

即席 會席 御料理

行司
西国 中村屋
同 亀清
同 河内屋
山下 がん鍋
西国 万八
同 柳屋
湯嶋 松金

上野 宝来亭
新宿 梅の木
牛込 大新
小梅 小倉庵
深川 雪中庵
通二 大平堂
通 舩橋

百川
大七
田川屋
伊勢大

深川 平清
山谷 八百善
嶋村

東

大関 酔月楼
関脇 川長
小結 甚左 豊田
前頭 中重
前頭 ゑるまのや
前頭 翁庵
前頭 東両国 青柳
前頭 今戸 大七
前頭 扇屋
前頭 上野 松源
前頭 山谷 八百半
前頭 芝口 以勢源

駒形 芳町 米沢 筋違 両国 浅草 同 同 高輪 浅草 駒形 両替町 二ッ目 平松町 横山町 赤坂

川外　万久　深川亭　田川屋　草加屋　伊勢屋　花屋　菊千　萬千　八百栄　初ふド　ミの市　相政　魚仙　尾張屋　増山庵

下谷 本丁 浅草 吉原 池之端 芝口 愛宕山 今戸 中之郷 三河町 両国 油町 富沢町 浅草 同

こねや　小ざくろ　万久　川外　二華屋　清凌亭　巳さや　水月亭　さゝや　いせ長　木屋　万直　大儀　駿三　魚十　九水　石むし　九長

河ちやうや　大橋半　小庵　和泉　山本佐　梅本　川しま　松吉　若まつ　吉田　遠州屋　石田　三清　さゝ木　魚金　むさしや　さかや　八百伝　今宮

目黒 橋和楼
向嶋 平岩
濱川 川崎屋
王子 扇屋
品川 石泉
大森 駿河屋
向嶋 植半
四谷 かり名
亀戸 巴屋
洲崎 蔦屋
堀之内 壽き

西

大関 橋場 川口
関脇 芳町 櫻井
小結 甚左 百尺
前頭 今戸 有明楼
前頭 誰袖
前頭 柳橋 梅川
前頭 栄秀亭
前頭 上野 河内屋
前頭 平松
前頭 深川 松本
前頭 東両国 柏屋
前頭 深川 ふく安

青山 両国 浅草 同 同 橋場 堀江町 高輪 四ッ谷 京橋 大伝馬町

さぬきや　吉浦　九竹　鮮揚亭　との勝　山城屋　きよ瀬　三河屋　魚佐　九竹　万清　むー文　松田　賣茶亭　さゝ了升　立場

深川 上野 深川 同 吉原 同 同 根津 白山 深川 麹町五

魚河大　三弥屋　進太　いづ勝　いせ平　る八十　魚世勘　東楽　金新　忽び子　忽び長　ときさ露　石む水　柳｜　三屋　八源　辻　そりまや

深川 白山 両国 深川 山下 上野 赤坂 三田

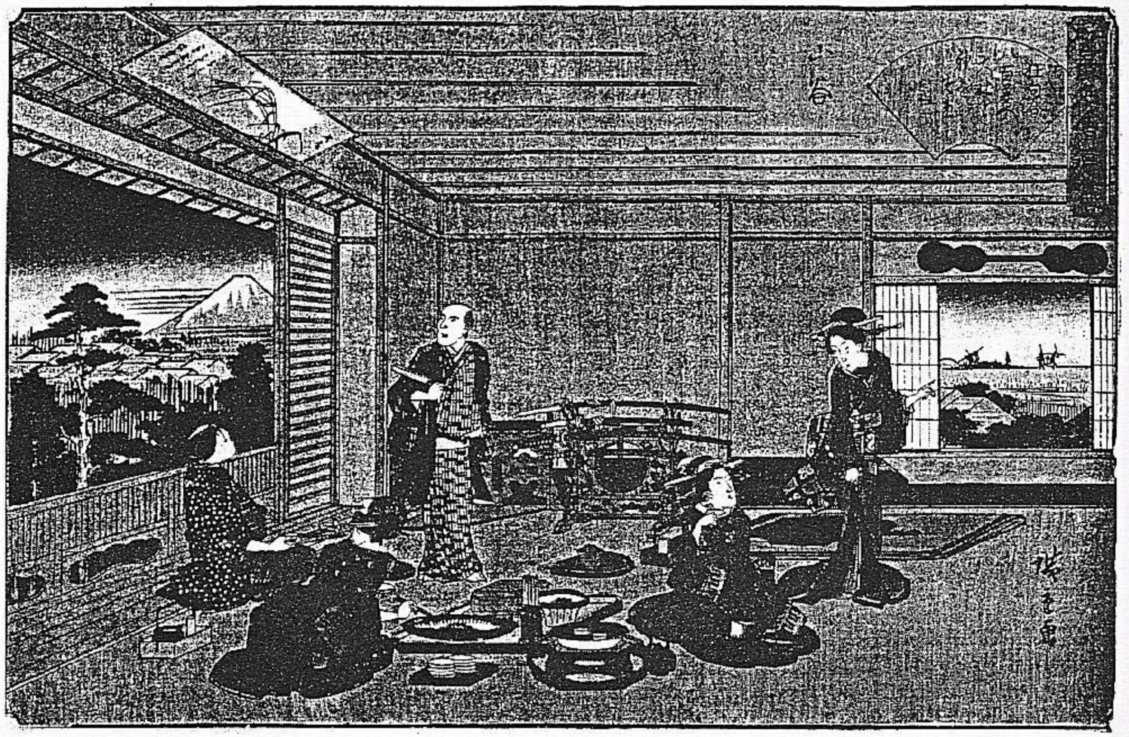
八百喜　三庄　玉三　中村　柳島　岡村　和泉　山口　鈴木　松林亭　石勘　八百勘　小鳴　泉金　若竹　九久　武蔵屋　さかきや　上州屋　十代倉

柳嶋 橋本
王子 海老屋
めうがや
ふじや
品川 釜屋
洲崎 武蔵屋
濱川 村田
向嶋 武蔵や
ふくや
目黒 内田屋
大森 山本

浅草 万年屋
神明町 長門
川崎 万年屋

芝田町 魚栄
東寿庵 芳町
か一八木

増田太次郎著「引札・絵びら・錦絵広告」誠文堂新光社刊より



▲八百善　広重画「江戸高名会亭尽・山谷」

客があまり待たされるので催促すると「玉川まで水を汲みに行かせているので」と言ったとかの話も伝わる江戸きっての高級料理屋。目をむくような値段だったといわれ、今も健在。

八百善料理本

序
旨甘芳馨之和煎熬
烹熟之宜皆所以熙精
神通氣血也周官載和

▲『料理通』（八百屋善四郎著）巻頭

八百善の初代主人がつくった全四巻の料理書。八百善の名によってベストセラーに。

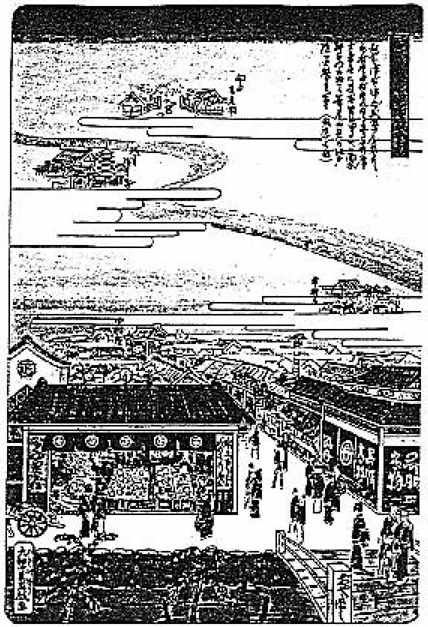
花咲一男編「大江戸ものしり図鑑」主婦と生活社

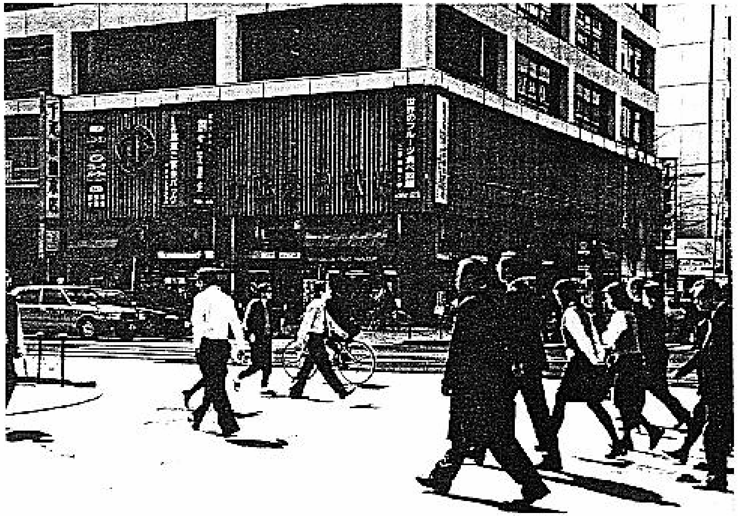
東京・日本橋
千疋屋總本店

売場 身ニヨイ バナナ (3241)0877代
フルーツパーラー・レストラン・喫茶 身ニヨイ ハハイ十 (3241)8818代

1F ○ショッピング フルーツ・アベニュー
○ファーストフード〈フエスタ〉
3F ○フルーツパーラー
2F ○レストラン〈テーメテール〉
8F ○ご宴会場

＊大手町ビル店 ☎3201-6966代
＊内幸町飯野ビル店 ☎3593-0321代
＊信濃町ステーションビル店 ☎3353-4741代
＊新宿高島屋店 ☎5361-1346
＊玉川高島屋店 ☎3707-7241
＊柏高島屋店 ☎0471-41-3924
＊横浜駅東口地下街ポルタ店 ☎045-453-6507
＊池袋西武店 フルーツパーラー ☎5992-8601
＊有楽町西武店 フルーツパーラー ☎3217-0798
＊川崎西武店 ☎044-245-3041
＊[illegible]東京営業所 ☎3279-1303代





このマークが保証のしるし

当千疋屋は最高の味をお届け出来るよう真心をこめて調製申し上げました〈全販売商品保証付き〉でございます どうぞ安心してお召上り下さいませ

よりご満足頂けるよう努力してまいり度く存じます 今後共よろしくお引立の程を

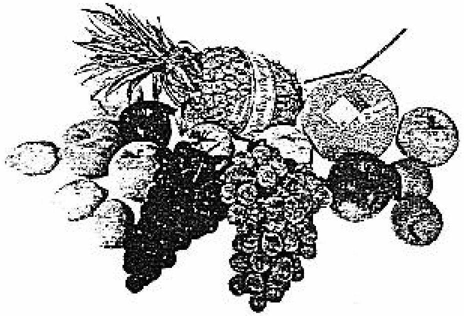
TO OUR CUSTOMERS,

We are sure the fruits sold in our shops make your favorite. In Japan, you can have different pleasures at each season. This is especially true of the taste of fruits. Rich variety, refreshing fragrance and gorgeous sweetness you will find in their characteristics. We are also confident that Japan produces the best fruits in the world, and SEMBIKIYA, who has been providing fruits of the best quality since 1834, is the best fruit shop in Japan.
Please enjoy the taste of Japan with SEMBIKIYA fruits.

The Worldly Famous Fruit Shop
SEMBIKIYA
NIHONBASHI TOKYO JAPAN

For Over A Century and Half
·········The King Of Finer Fruits

サムライ弁蔵——— 武蔵国埼玉郡宇千疋の郷（現・埼玉県越ケ谷市千疋）で槍術の指南をしていた弁蔵という侍　諸国飢饉や江戸市中に道場を構えることの幕府禁止令　不況時の世情に抗することあってか天保5年（1834）江戸は日本橋葺屋町（現・人形町）に「水菓子安うり処」の看板を掲げ千疋屋弁蔵を名のり果物・蔬菜を商う店を開いたのが始まりです。
葺屋町は江戸の名物三千両といわれ一夜明ければ千両の金が動くとされる吉原・魚河岸・芝居町に近く商業地としては恰好だったようです。二代目文蔵は徳川将軍家御用商として内外珍果実を世にひろめて我が国初の果物専門店が誕生いたしました。



東京・日本橋 千疋屋總本店 (03)3241-8818(代)
創業 天保五年

回り舞台 日光街道 ②

越谷市相模町六丁目の大聖寺。寺には、徳川家康が寝たとされる絹地の夜具が伝わる。金色に青緑色の織り模様、刺しゅうで、大小色とりどりの菊花と葵の紋を散らした一着。市の文化財に指定されている。

加藤弘道住職(六三)によると、「家康の背丈はどれぐらいだったんだろう」と、夜具にそでを通してみる人もいた。「その話を本間先生にすると、とても驚かれました」

「本間先生」は越谷市文化財調査委員長の本間清利さん(七九)のことだ。通史二巻、史料編四巻を刊行した「越谷市史」編さんの中心となり、「続資料編」「越谷の歴史物語」などの編集も担当。現在も越谷市立図書館の事務室で古文書の解読作業を続ける。

本間さんの父親は宮城県で教師をしていた。開拓の夢をみて北海道に渡り、本間さんはそこで生まれる。夢が破れて一家は上京、本間さんは東京の尋常高等小学校卒業だ。三十一歳で越谷にきて、都内の鉄工所で働いた。四十歳のころ俳句会に入り、寺社を回るうち歴史に興味が移り、独学で古文書読みを会得した。「解読できない文字が別の史料で読めたりする。やればやるほど、面白い」

本間さんによると、家康が大聖寺に泊まった記録は残っていないが、鷹狩りの好きな家康は水鳥やツルが飛来した「水郷越ケ谷」をたびたび訪れた。最初は現在の越谷市増林城ノ上に休息所、幕府開設翌年の一六〇四年には現在の市役所近くに御殿を建てた。寺もよく利用したらしい。

御殿があった場所はいまも「御殿町」と呼ばれる。家康が好んだ水郷の面影は濃い。利根川、荒川の本流は江戸の水防や新田開発、舟運のため将軍が河川改修するまで、県東部を流れていた。現在の古利根川、元荒川だ。元荒川べりには「埼玉鴨場」もある。

駒形どぜう

浅草で生き残る郷土料理

一帯はウナギ、ドジョウ、ナマズなどの名産地でもあった。江戸時代の絵図に、「越ケ谷宿と粕壁宿の間の茶屋の名物は鰻の蒲焼」という記述も残る。陶芸家で料理研究家として名をきわめた北大路魯山人も、「越ケ谷辺の地黒のどじょうが上物」と書く。

旧日光街道筋には現在も古い川魚料理屋が多い。県内の約九百店にウナギを卸す大宮市の問屋「鯉平」の清水良則営業部長(四二)は「日光見物の客を当て込んで、明治以降も東京からたくさんの店が進出した」と話す。

川魚料理屋らしからぬ名前の店が、宿場だった越谷市大沢の元荒川べりにある。「温飩屋」といい、一六一五年の創業。店主の大山泰弘さん(四七)で十二代目になる。饂飩はうどん。「ウナギ料理は江戸中期から始めたと聞く。おじいちゃんの代まで天然ものでドジョウ料理も出したらしいが、注文が少なくてやめたようです」

川向かいの「新見世」も創業約百年。包丁を握る会田奨さん(三九)は五代目だ。母親の成子さん(六七)は「元荒川でも周辺の川水でも、ウナギやドジョウはいっぱい捕れた。ドジョウは柳川なべ、かば焼き、煮付け、汁などにした。今は捕れても細くさい。『いいものが入ったら頼む』というお得意さんがいて、たまにはドジョウも出しますが、いい天然ものはめったに手に入らない」と話す。

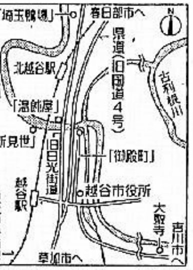
ドジョウ料理は東京・浅草、浅草寺に近い「駒形どぜう」に生き残る。身を開かない「まる」のドジョウが入る「どぜう鍋」で有名だ。

「六代目越後屋助七」を名乗る渡辺孝之社長(六〇)によると、初代助七は松伏町の農家の四男に生まれた。浅草・馬喰町にあった長田屋で修業し、一八〇一年にどんぶり飯屋「越後屋」を開いた。渡辺さんは、大沢の出身だという。

「ドジョウは庶民が安く簡単に口にできた、貴重なたんぱく源。本人も好物だったんでしょう。ドジョウを酒に浸し、みそで煮るとまるで食べられる料理法を見つけて、大当たりした。いまも『まるを商うべし』が家訓です」

渋谷店も合わせ年間に扱うドジョウは約五十トン。「いまは養殖ものの方が粒ぞろいで安全です。でも、六月から八月の旬にたまに入る天然ものはドジョウの香りがして、通は好む。天然ものの産地は昔は草加、越谷だったけど、いまは上尾近辺に移りました」

駒形の店の前には、同店をひいきにした劇作家で俳人だった久保田万太郎の句碑が立つ。「神輿まつまのどぜう汁すゝりけり」



徳川家康が着用したと伝わる夜具。菊花や「葵の紋」の刺しゅうが施され、きらびやか＝越谷市相模町6丁目の大聖寺で

身を開かない「まる」のまま食べるのが特徴のドジョウ鍋と、「6代目越後屋助七」の渡辺孝之さん＝東京・浅草の「駒形どぜう」で

大聖寺 寺伝によると、奈良・東大寺の開山僧良弁が大仏殿造営のための全国募金行脚で訪れて開山。本尊の不動明王像は良弁が相模（神奈川県）の大山でケヤキを彫って作った2体のうちの1体とされ、「関東三大不動」のひとつとしてにぎわい、地名にもなった。家康から60石、約11㌶の寺領を与えられて大相模不動院から大聖寺と改名、家康着用の夜具、家康寄進の太刀が伝わる。多くの別院や別坊があったが、1895年に山門（1804年建造）を除いて火事で焼け、再建されたものの往時の威容は戻らなかった。

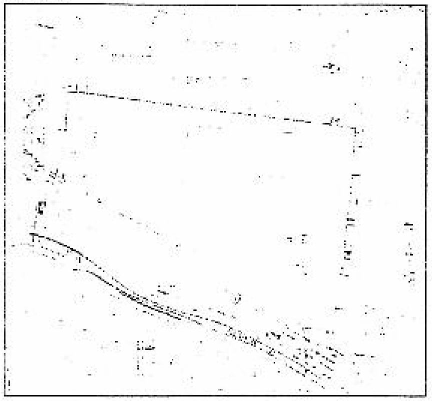
埼玉鴨場 東京湾に面した浜離宮で捕獲できるカモが減ってきたため、宮内省（現宮内庁）が越谷市大林の元荒川べり約10㌶を買収して1908年に開設。家ガモをおとりに叉手網（さであみ）で野生のカモを捕らえる狩猟法を継承することも目的に、カモの飛来シーズンに千葉県内の鴨場と手分けして接待カモ猟が行われる。捕獲したカモは標識をつけて放鳥、宮内庁の職員らがきて調理するカモは、アヒルとマガモの交配種である合ガモを使うという。

天声人語

東京の老舗(しにせ)でつくる「東都のれん会」が五十周年を迎えた。戦後のすさんだ時期に、「江戸の文化を残そう」と声を掛け合って旗揚げしたのだそうだ▼デパートを会場に毎年、会員が店を出すほか、研修旅行や勉強会などを重ねてきた。特色は会員資格の厳しさ。〈百年以上にわたり代々の祖業を継承する「のれん」を正統に引き継ぎ……〉と規約は定める。経営権が人手に渡ったり、後継者が育たなかったりすれば、辞めるほかない▼現会員は五十店。和菓子やつくだ煮など食べ物商店が目立つが、刃物、ほうき、眼鏡といった顔ぶれも見える。一番の老舗は室町時代から続く和菓子店だ。元禄、享保、天保など江戸期に創業した店も並ぶ▼古都や城下町には、何百年も続いた名店がある。しかし明治維新、大震災、戦災と続き、最近ではバブル経済や不況にも揺さぶられた。浮き沈みの激しいなかで、昔からののれんを守る苦労は並大抵でなかったに違いない。東都のれん会の場合も、発足してからの半世紀に、十二店が廃業や身売りで資格を失い、同じ数の新顔に代わった▼それでも、本当の試練はこれから。副会長格の細田安兵衛さん（「栄太楼」会長）の見立ては厳しい。いままでは混乱の先に復興が待っていた。けれども、人口が減る来世紀は、そうはいくまい。客の数が減るうえに、高齢化で食べる量も落ちる。「日本の胃袋が小さくなる」のである▼先代が会の呼びかけ人だった「駒形どぜう」の六代目越後屋助七さんは、二種類の名刺を持っている。一つは柳川なべで知られる家業のもの。もう一つの肩書は、居酒屋など約三十店を抱える外食産業の代表取締役だ。来年、創業二百年を迎えるが、守りだけでは取り残される、と断じる▼大銀行が看板を下ろす時代だ。のれんの奥には行く末に思案をめぐらす当主の姿がある。

⑱東都浅草絵図（一八六一年）

範囲図



解説

本図は、三版中最終版。初版は嘉永六年(1853)。二版は安政四年（1857）。復刻版は最終版を使っている。

収図範囲は、台東区浅草雷門より神田川までの両国地域。

浅草雷門から北へ抜ける大通りが日光街道。馬頭観音を安置する駒形堂のところで浅草観音参道と別れる。広い参道を直進すると雷門。広小路は例によって火除地。

広小路の西詰りがお東こと東本願寺の表門。東本願寺は京都東本願寺の別院で浅草本願寺ともいい、俗称は浅草御坊・東門跡。当初、神田にあったが明暦の大火で焼失し、浅草に移った。当寺は、不思議と火事に弱く、関東大震災の折も焼失、昭和二十年(1945)の東京大空襲の折も本堂だけ残して焼失。昭和三十五年(1960)に復興した。現在は、京都のお西と区別するため東京本願寺と言っている。

東本願寺の南と西の稲荷町は寺町。これら数多くの寺はやはり明暦の大火で神田あたりより移されてきたもの。

稲荷町の寺町の南に外様大名が、江戸の守りをかためている。下谷絵図で説明した三味線堀も、本図を見ると納得するかも知れない三味線堀の出口にかかる転軫橋は、堀の形が三味線に似ていたので三味線の糸を巻く転軫にひっかけて名付けられた。この堀は昭和初年に埋立てられた。

三味線堀が大川へ流れて行く川筋を三味線堀川と言い、この中程の甚内橋のところに鳥越総鎮守鳥越明神が鎮座ましましている。現在の鳥越神社である。十二月の"どんど焼"と千貫神輿で有名。

三味線堀川と新堀川の合流点のところにある「猿屋町御用屋敷」は浅草司天台（天文台）と言われた幕府天文方・測量所。こんな町中に天文台を設置するとは現在では考えられないが、当時、浅草御門を過ぎれば郊外の感があったのであろう。

浅草御蔵とあるのが、元和六年（1620）鳥越の丘（周りより若干高くなり台地状であった。まわりの大名屋敷あたりは低湿地）を切崩し隅田川を埋めて造った幕府米蔵。旗本・御家人がここへ扶持米（○○石とか××俵扶持の）を貰いにくるのであるが現物支給。これでは困るので蔵前で営業する札差（両替商兼金融業）に手数料を払って現金化して糊口をしのいでいた。これら札差は百一割は当り前。ひどい奴は十一のナラ金以上の金利をとり大名・旗本・御家人の生殺与奪の権を握っていた。

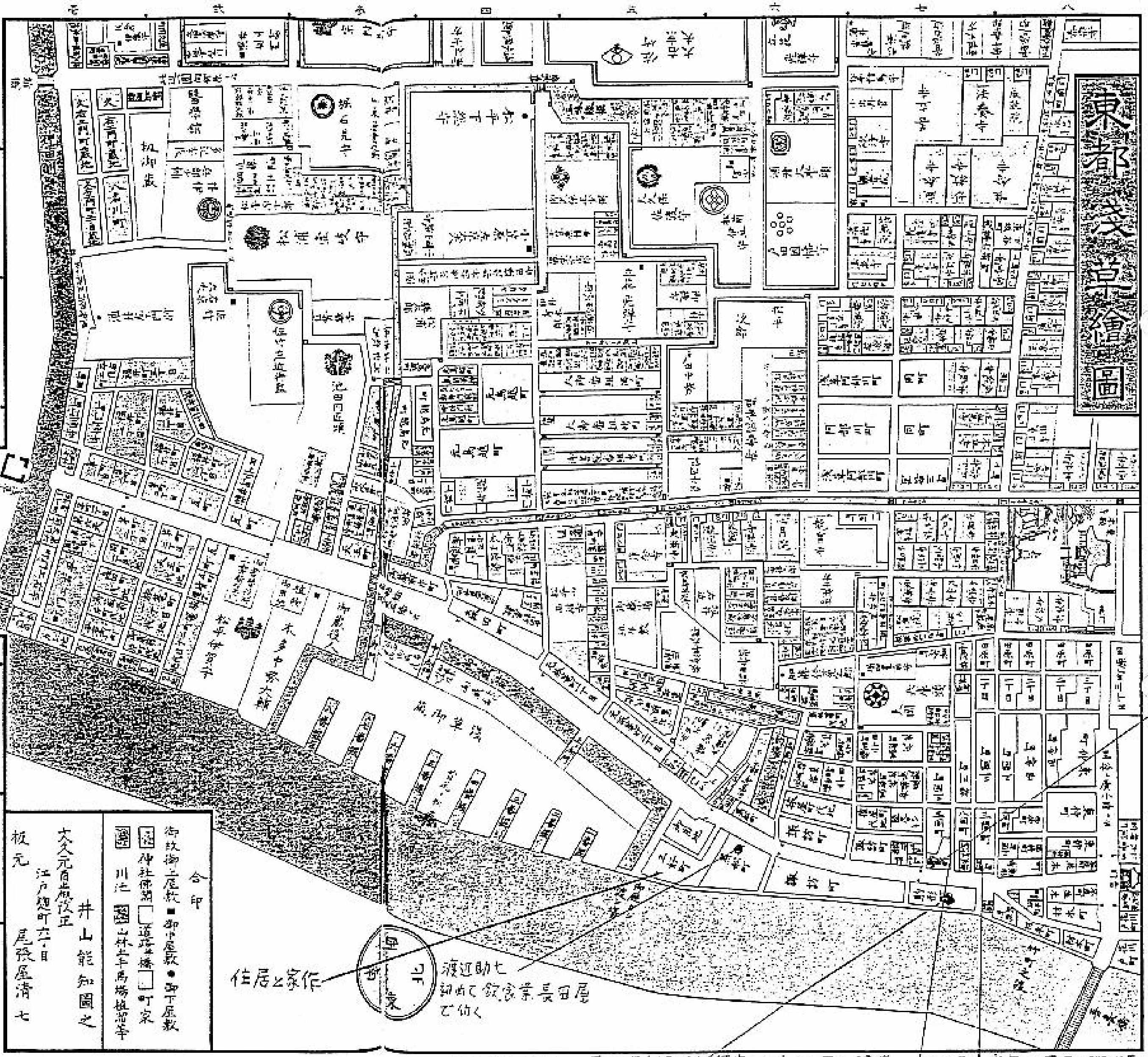
御厩渡シ場は昔、幕府の厩があったので「おうまやがし」と呼ばれていたが、江戸っ子は"おんまいがし"となまっていた。

※吾妻橋……大川橋、吾妻橋とも言い、現在も同じ場所にある。明治二十二年（1889）鉄橋となるが関東大震災で被損、昭和六年（1931）に架替。[illegible]

※駒形橋……駒形町のところに昭和二年（1927）に架けられた。

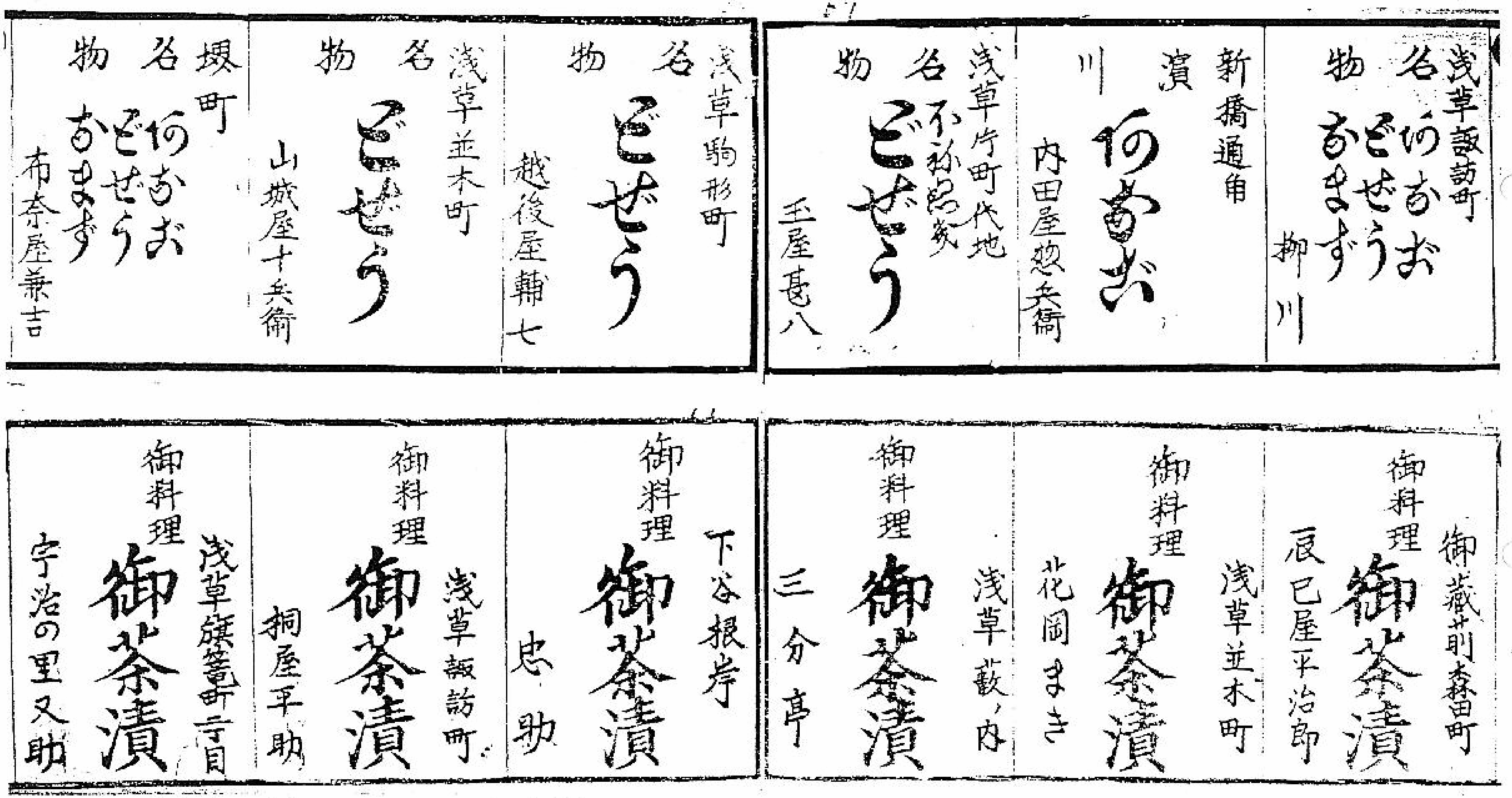
※厩橋……厩船町のところに、昭和四年（1929）三代目として架けられ現役である。初代は明治七年（1874）木橋であった。二代は明治二十六年(1893)鉄トラス一橋、関東大震災で焼失。（ハ－と）

※蔵前橋……浅草御蔵三番堀と四番堀の間の南端に、震災復興計画によって昭和二年（1927）完成した。（同－と）



（原本492mm×534mm）

⑱東都浅草絵図（一八六一年）



77　江戸のお茶漬屋，川魚料理屋（江戸名物酒飯手引草）

「江戸時代図誌」筑摩書房刊より

魚盡見立評判第初輯

文久元年酉秋新板

上野山下
元禄年中ヨリ
會席相續仕候
濱田屋

牛込 大新

會席
献立
料理通

行司
芝神明 車屋
深川 平清
木挽町 酔月
橋場 川口

元柳橋 駒形 深川亭
初富士
立田 相生
浅草 魚仙
平松町 駒形 川升

坂本町 伊勢太
茅場町 中重
金吹町 萬屋
呉服町 駿河屋

勧進元
数寄屋町 嶋村
新鳥越 八百善

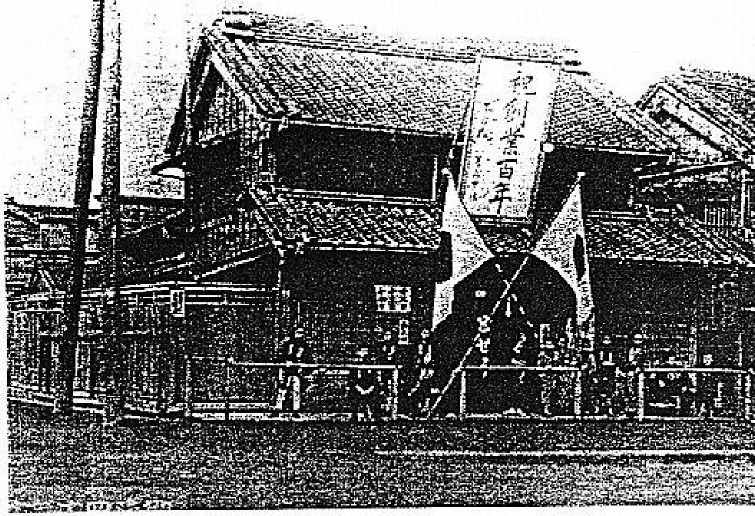
名代茶漬店之部

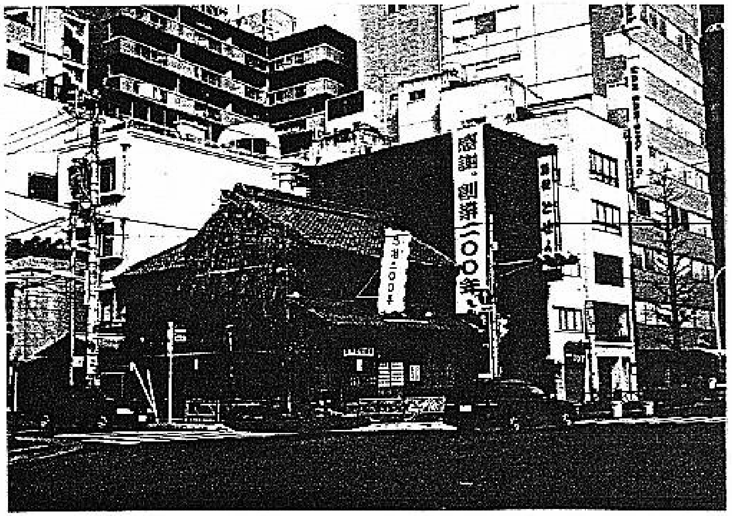
根元鮨店之部

38

江戸の代表的料理屋の献立一覧（魚尽見立評判会席献立料理通）中田節子著「広告で見る江戸時代」角川書房刊より

創業百年当時の店（明治四十年）





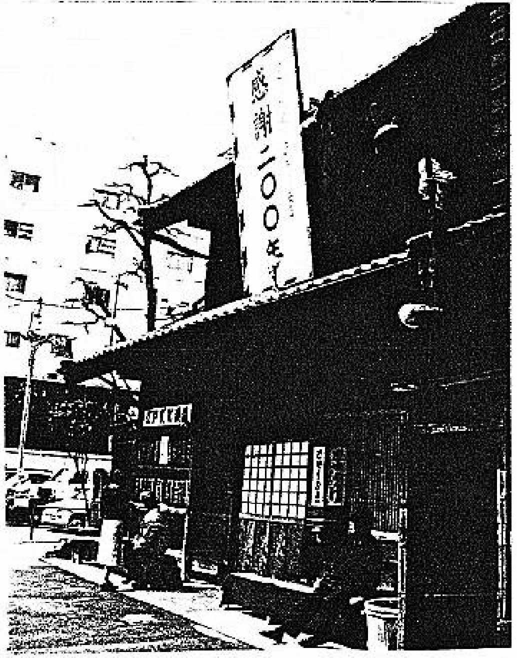
創業二〇〇年（平成12年）

百年祭の頃

その当時の駒形どぜうの店内の様子はどんなだったでしょうか。

当時の店の様子を描いた貴重な文献、若月紫蘭著『東京年中行事』（明治四十四年発行、新版は平凡社東洋文庫）の付録に越後屋の訪問記があるので引用させてもらいます。

駒形のどじょう汁

雷門から南へ次の電車停留場が駒形である。そこの四辻の北の角が、音に名高い駒形のどじょう汁で薬研堀のそれと盛名を競うものである。その昔、江戸時代にどじょう屋という看板を掲げたのは、上の二つと埋堀と中橋のそれとたった四つであった。が、後の二つは今では廃業してしまって、残った二つの中でも殊に駒形のが知られている。

暖簾をくぐって座敷に上ると、百年記念明治四十年十一月と云う額が先ず眼につく。お客はどちらかと云えばもちろん中流以下が多いのであるが、生粋の江戸ッ子や、その道の通人などの間にもなかなかお馴染が少なくない。何はさて置き、値段の安いのが目っけもので、どじょう鍋六銭、どじょう汁一銭五厘、お酒七銭、御飯一人前四銭、半人前三銭と云うほかに、鯨汁二銭五厘、鯰鍋十五銭、鯰汁五銭と云うのもある。従って鍋と汁とに飯と酒までつけた処が二十銭足らず、飯と汁だけですませば高が六、七銭で事が足るので、飯時分前後になると、朝から車夫行商人を始めとして、色んな種類の人がエンヤエンヤと詰めかける。なかには三度が三度、ここで一日のお腹をこしらえてる運中も少なくないと云うのも、まんざら嘘ではなさそうに思われる。それにつけても「君は今駒形あたりどじょう汁」とか何とか、今蜀山人の駄洒落たのは、吉原帰りの通人の立ち寄るものも少なくないことを示すものではなかろうか。